

市民文化財研究員活動報告書 24

2020. 3

仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館

は じ め に

地底の森ミュージアムが開館して23年が過ぎ、これまで87万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、22期166名が市民文化財研究員の研修を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第23期市民文化財研究員5名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、その活動成果を報告するために本書を作成しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

令和2年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

公益財団法人 仙台市市民文化事業団
仙台市富沢遺跡保存館
館 長 身崎 尚

目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

古代東北で何が起きていたのか

—対蝦夷政策における柵戸と城柵— 小川 益美 8

ことの始まり

—イネ（コメ）の始まりを考古学初心者が探ると— 木村 俊夫 20

土器との対話—高柳遺跡出土の渦巻文土器— 島村 幸子 28

大代遺跡—古墳時代後期の東北での一例— ジェルマナ グレコ 36

森を育む縄文人 樽 義夫 44

例 言

1. 本書は令和元年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、その他は仙台市富沢遺跡保存館である。全体の編集は館員鈴木英梨が行った。
3. 報告書作成に際して、主に参考とした文献や資料は各活動報告に参考文献として記載している。

I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらうたのしい地底の森教室、石器を使ってみようコーナー、参加者を公募する旧石器体験教室、考古学講座、富沢ゼミなどを行っている。こうした活動の参加者には、新たな興味をもったり、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う市民がいて、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に市民活動のための専用スペースはなく、また、研修室の利用や利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、平成30年度まで22期にわたって合計166名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～23』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をホームページで公開している。

令和元年度は、第23期市民文化財研究員として6名が参加し、うち5名がそれぞれのテーマに沿って自主的に活動を行った。

Ⅱ．市民文化財研究員とその活動

1．目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

2．活動期間

年度の1年間とする。定員は10名（今期は平成31年4月10日～令和2年3月25日）

3．支援の内容

（1）研究場所の提供

- ・地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

（2）研究の補助および研究方法についての相談受付

- ・学芸員による考古学についての講義。
- ・学芸員による個人ごとの対応。

（3）収蔵図書の利用

- ・室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

（4）市民文化財研究員証の発行

- ・登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

4．活動内容

（1）毎週水曜日午前2時間の学習（地底の森ミュージアム1階研修室）

登録日（館員1名が在室）

（2）年1～2回開催する見学会での学習（遺跡や博物館施設の見学）

（3）活動報告書の刊行

（4）その他

- ・館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。
- ・登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。
- ・研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

Ⅲ．活動支援概要

1．概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

平成31年4月、令和元年5～6月 登録日学習の開催日

7月～9月 自主学習期間

10月～12月 登録日学習の開催日 活動報告執筆のための相談

令和2年1月～3月 登録日学習の開催日 活動報告執筆のための相談

2．第21期市民文化財研究員修了者（五十音順）

小川 益美 木村 俊夫 島村 幸子 ジェルマナ グレコ 樽 義夫

3．週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を水曜日の午前に設け、活動を行った。

4．登録日と出席者数

平成31年4月10日 オリエンテーション【7名】

4月17日 講義【6名】 4月24日 講義【5名】

令和元年5月 8日 講義【6名】 5月15日 館外研修【6名】

5月22日 講義【6名】 5月29日 講義【6名】

6月 5日 講義【6名】 6月19日 講義【6名】

6月26日 館外研修【5名】

10月 2日 講義【8名】

10月 9日 研修旅行（ボランティア合同）

10月16日 館外研修【5名】 10月30日 講義【5名】

11月 6日 講義【5名】 11月13日 講義【5名】

11月20日 講義【6名】 12月 4日 報告準備【6名】

12月11日 講義【5名】 12月18日 報告準備【5名】

令和2年1月 8日 報告準備【4名】 1月15日 報告準備【4名】

1月22日 報告準備【4名】 1月29日 報告準備【4名】

2月 5日 館外研修【5名】 2月19日 報告準備【5名】

2月26日 報告準備【2名】 3月 4日 報告準備【3名】

3月11日 報告準備【5名】 3月18日 報告準備・提出【5名】
3月25日 報告提出【3名】

5. 館外活動

5月15日は縄文の森広場の見学、6月26日は郡山遺跡と陸奥国分寺尼寺ガイダンス施設の見学、10月16日は縄文の森広場で山田上ノ台遺跡の発掘調査体験、2月5日には仙台市教育委員会文化財課の向田収蔵庫の見学を行った。10月9日には研修旅行として、南相馬市博物館（福島県南相馬市）と国史跡浦尻貝塚の発掘現場の見学を地底の森ミュージアムおよび縄文の森広場のボランティアと合同で開催した。また、課外活動として、熊野堂横穴墓群（名取市）の見学を7月2日に行った。

IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡をもとにして、研究員がそれぞれの興味関心をもとにテーマを設定し、調査を行った活動成果をまとめた。第23期市民文化財研究員は、平成31年2・3月の募集で、実際の活動は4月からであった。申込は7名であったが、2名の方が年度途中で都合が悪くなって辞退し、5名が活動を継続した。

それぞれの活動をみると、活動当初から具体的なレポート作成に向けた動きをする方、当館での学習活動や他館を見学するなかで興味関心を持ったことを調べる方など、各自の関心をもとにして積極的な活動の傾向がみられた。それぞれが取り組んだテーマについては、遺跡や博物館の見学、関係施設への調査、文献やインターネットなどからの情報収集など、各自が様々な方法で行い、課題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしていって、今回は5名の活動を報告することにした。



6月26日 郡山遺跡の見学



10月16日 発掘調査体験

古代の東北で何が起きていたのか—対蝦夷政策における柵戸と城柵—

小川 益美

はじめに

古代中国では、異なる文化や習慣を持つ周辺地域を「夷狄^{いてき}」として卑しむという「華夷思想」が確立されていた。「倭国王」は、中華思想に強い影響を受けたと思われ、王の支配する周辺には夷狄に対応する存在として東北に「蝦夷^{えみし}」を、九州に「隼人^{はやと}」を当て、古代国家権力を持って彼らの住む領土に拡大政策を実行した。畿内を中心にした古代国家は6世紀後半ごろから7世紀にかけて、東北地方の多くの地域の人々を、支配に従わない異なる風俗を有する人々である蝦夷とし、防衛柵である城柵を設営し始めた。7世紀に入ると東アジアの情勢は覇権争いが緊迫化を増し、倭国は中国に出現した唐(618～907年)に対抗するために、蝦夷の住む北方への広大な領域拡大は急務となった。太平洋側では郡山遺跡(宮城県仙台市)を嚆矢として、仙台平野以北に次々と城柵を増設しながら領域拡大を進めていったのである。

本論ではこの時代の律令国家の領域拡大政策の在り方と対蝦夷政策のために関東地方から東北に移住を強いられた移民集団の「柵戸^{さくこ}」と、北方政策として設営された「城柵」を中心にして、文献史料や出土資料から考察し、古代東北において何が起きていたのかを論じてみたい。

1 政策と柵戸

古代国家は律令体制を整備し、天皇を中心とした体系的な中央集権国家を作り上げた。その中で対蝦夷政策を名目として軍備を整え、北方領域拡大に乗り出して行く。

1) 律令国家と政策

律令制とは古代中国を参考にした制度で、「王土王民」、すなわち土地と人民は王の支配に服属するものであり、人民に対して租税、労役、兵役が一律に課せられるものであった。日本の古代律令国家においては、7世紀半ばから形成され、奈良時代を最盛期として9世紀頃まで続いた一形態であった。

古代の律令国家は国郡制を採用し、全国に約70ある国には国衙^{こくが}を、その下の約600の郡には郡家^{ぐんけ}が置かれた。国衙は中央の支配を象徴する施設であり、都から派遣された役人が国司となって、地方行政を担当する郡家を監督し、中央に報告する。戸籍^{ぐうじ}の作成や税の徴収は郡家の役人である郡司の仕事であり、郡司には地方の支配者が採用され、裁判権があたえられて地域の百姓を監督していた(千城 2013)。

人民は「戸」に属し、戸籍が作られた。国家が掌握していた当時の列島人口は540～590万人と推計されている(平川 2019)。公民となった彼ら「百姓」は祖・庸・調の租税と労役の雑徭が課され、ほぼ一戸ごとに兵士が徴発された。兵士は、九州沿岸の防備にあたる防人^{さきもり}として、また東国では対蝦夷政策の鎮兵^{ちんべい}となった。

2) 坂東・柵戸の足跡

『日本書紀』大化3年(647年)に「淳足柵^{ぬたりのさく}を造り、柵戸^(註1)を置く」と記され、これが東北辺境における柵戸の初見とされる。

8世紀の律令体制下において古代国家の政策を支える基盤として、関東以北を「東国」と位置づけ、それに伴い対蝦夷政策の基盤となる地域として東国の中でも「坂東^(註2)」というエリアが形成された。図1で示す通り、関

東地方の相模・武蔵・上野・下野・上総・下総・安房・常陸の八国を「坂東」とし、特に古代国家の政策に抵抗し、それに従わない蝦夷に対する征討は急務の事業であった。

坂東の人々は蝦夷支配と征討のために東北



図1 東北および坂東範囲 (平川 2019)

地方に移住を強いられた柵戸となった。彼らは蝦夷からの襲撃に対抗する兵士(鎮兵)として防衛施設である「城柵」の建設や運営に携わり、次々と増設する城柵のために柵戸は次の城柵の領地へと移住させられている。政策に抵抗した蝦夷の中にも権力に服属したものは「俘囚」^(註3)と呼ばれ、強制的に東国(関東)や西国(九州地方)の防人になり移住さ

せられた(横浜市歴史博物館編 2002)。

これら柵戸や俘囚の移動の状況は『続日本紀』に記されている(表1)。

それでは坂東から東北に移住させられた柵戸は東北の蝦夷の地に於いて、どのような足跡を残していたのだろうか。

7世紀に入ると蝦夷から獲得した領域の守りを固める一方、さらに北方支配の政策を進めるために砦となったのが、関東移民の柵戸であった。この時期の東北における特色は、古代国家が北方の住民である蝦夷の地に城柵を築き、その周辺に柵戸を組織的に移住させるという政策をとり始め、その柵戸が蝦夷と直接相対するようになったことである(熊谷 2015)。

7世紀中葉に造営されている郡山遺跡をはじめ、大崎平野を中心とする名生館官衙遺跡^{みょうだてかんが}(宮城県大崎市)や江合川流域の南小林遺跡^{みなみおぼやし}(宮城県大崎市)などの官衙遺跡や関連遺跡からは関東系土師器が出土していることから、これらの造営と運営には柵戸が深く関与していることが窺われ、柵戸はこれらの城柵遺跡の周辺に居住していたものと推測される。蝦夷の地に移住してきた柵戸は土器を携行しな

西暦	和暦	年月	配置先	民	戸・人数	出身国	典拠
648	大化	4	磐舟柵	民		越・信濃	日本書紀
714	和銅	7・10	出羽柵戸	民	200戸	尾張・上野・信濃・越後	続日本紀
715	霊龜	元・5	陸奥	富民	1,000戸	相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野	続日本紀
716		2・9	出羽	百姓	各 100戸	信濃・上野・越前・越後	続日本紀
717	養老	元・2	出羽柵戸	百姓	各 100戸	信濃・上野・越前・越後	続日本紀
719		3・7	出羽柵	民	200戸	東海・東山・北陸	続日本紀
722		6・8	陸奥鎮所・柵戸		1,000人	所国司駐点	続日本紀
757	天平宝字	元・4	陸奥国桃生柵	不孝・不恭			続日本紀
			出羽小藩	不友・不順者			
		元・7	出羽国小藩村柵戸	橘奈良麻呂の乱の加担者			続日本紀
758		2・10	桃生城柵戸	浮官の徒		陸奥	続日本紀
759		3・7	出羽国柵戸	左京犯罪人			続日本紀
		3・9	雄勝柵戸	浮浪人	2,000人	坂東8国・越前・能登・越後	続日本紀
760		4・12	桃生柵戸	薬師寺破戒僧			続日本紀
762		6・閏12	陸奥国	乞索児	100人		続日本紀
763		7・9	小藩柵戸	河内国丹比郡の人(母を殺害)			続日本紀
769	神護景雲	3・正	陸奥国柵戸	浮官の百姓	2,500余人		続日本紀
795	延暦	14・12	伊治村	軍を逃れた諸国の軍士	340人		続日本紀
796		15・11	伊治城	民	9,000人	相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後	日本後紀
802		21・正	瓶沢城	浪人	4,000人	駿河・甲斐・相模・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野	日本紀略

表1 柵戸関係記事一覧 (横浜市歴史博物館編 2007)

いで、移転先で故郷と同じ土器を作り使用していた。柵戸の文化が汲み取れるものに、関東系の^{つき}環(飲食物を盛るのに用いた椀型の器)などがあり、それらは東北系のものと異なり、内側はナデ仕上げで赤褐色である。東北系のものは、内側を煤を使ったと思われる黒色に仕上げた土器であり、甕の形も関東系のそれとは異なっている(図2)。



図2 名生館官衙遺跡の竪穴住居から出土した土器
右手前の赤っぽい土器と右奥の甕は関東系。左端の甕とその手前の皿と椀は東北系。(横浜市歴史博物館編 2002)

竪穴住居内で煮炊きを行ったカマド周辺にもその違いがある。8世紀前半、^{かんのんざわ}観音沢遺跡(宮城県栗原市)で見つかった竪穴住居14軒はすべて家壁の内側にカマドがあり、うち9軒は長い煙道を持つ東北系のものである。また^{おこまどう}御駒堂遺跡(宮城県栗原市)では、29軒中26軒のカマド部分が住居の壁外へ突き出して焚口を土器で補強していた。こうしたカマドのつくり方は関東系であると考えられる(村田 2019b)。

このように、上に記した東北南部の遺跡から出土した資料の中から、柵戸の足跡を覗うことができる。

「坂東」の初見は、『続日本紀』神亀元年(724年)である点が興味深い。同年には陸奥国府として多賀城の成立、黒川以北10郡の成立、防衛施設の兵士となる鎮兵の成立など、陸奥一國で蝦夷支配を遂行していこうとする体制が確立された時期である。これに対応して、古代国家は蝦夷支配遂行の後方支援をする形で東国8カ国を一括して、それを象徴する呼

称として「坂東」を設定したと考えられている(横浜市歴史博物館編 2002)。

また、黒川以北10郡とは黒川・加美・色麻・富田・玉造・志太・長岡・新田・小田・牡鹿の江合川を中心とした大崎平野から石巻海岸平野にかけて置かれた小規模な郡の総称であるが、8世紀初頭から前半にかけて、坂東の柵戸と陸奥南部からの大量移民を基盤として成立していたと思われる(横浜市歴史博物館編 2002)。

これら黒川以北等の郡名が柵戸の関東にある故郷の郡名と一致することが判明しており、この地域が柵戸の移住地となったことが推測される。移民政策は、8世紀半ばになると坂東からの犯罪人や浮浪人などの移住が中心となるなど性格を変えながらも継続されていた(表1)(横浜市歴史博物館編 2007)。

柵戸の東北への移動手段として『日本書紀』では、日本武尊が蝦夷征伐に相模から上総に船を使っている話^(註5)や、齐明天皇四年(658年)阿倍比羅夫が日本海を北上して蝦夷征伐を展開したことが記されている^(註6)ことから、太平洋沿岸地域において海上路が利用されていたことも推測される。太平洋沿岸の郡山遺跡や^{あべのひらふ}牡鹿柵・郡家に推定される赤井遺跡(宮城県東松島市)などは、海上交通と河川交通の拠点として成立したと考えられ、柵戸移動もこのような海上交通を利用した可能性があった



図3 赤井遺跡出土の関東系土器

7世紀後半から後葉の土器でその出自は埼玉県北西部に求められる。赤井遺跡では出土量は極めて少ないが、律令制始動といった社会的、政治的要因によって移民が流入したことを示す。東松島市教育委員会所蔵。(横浜市歴史博物館編 2007)

と思われる。

赤井遺跡では7世紀前半から中葉にかけて集落が形成されて、図3で示すように、この地域に於ける同時期の土器は関東系土師器が主体となり、柵戸集団によって営まれていたと思われる。この傾向は第一世代ほど強く、世代を経るごとに移住地の土器と融合している。このため東北地方で褐色・赤褐色の食器や長胴甕などが出土した場合は、柵戸が製作・使用した可能性が高い（村田2019a）。

このように律令国家は対蝦夷政策の兵士を坂東から徴発し、それぞれの兵役として配置し、その人数は神亀元年（724年）から弘仁2年（811年）まで約34万2,710名の坂東移民の柵戸が動かされているのが『続日本紀』に記されている（横浜市歴史博物館編2002）。

3) 渡来人と柵戸

朝鮮半島で7世紀後半には度重なる動乱が勃起して、多くの百済・新羅・高句麗の人々（渡来人）が日本列島に辿り着き、東国に移入していたことがわかる（横浜市歴史博物館編2002）。古代国家の編纂した歴史書には「渡来（人）」とは表記されてはいない。あくまでも王（天皇）の徳に帰服した、いわゆる「帰化（人）」と表記されている。彼らは古代中国や古代朝鮮から渡来した人々である。朝鮮半島では660年に百済が滅亡すると王族までもが倭（日本）に亡命した（平川2019）。『日本書紀』天智天皇5年（666年）には、「百済の男女2000余人を東国に住まわせ、百済の人々に対して、僧俗を選ばず3年間、国費による食を賜った」と記している（宇治谷1988）。

東国におけるこの頃の行政区分を見ると、郡の下位に郷が作られている。甲斐国の例では4郡のうち3郡は、山梨郡—山梨郷、八代郡—八代郷、都留郡—都留郷であり、郡名と郷名が同じであるが、巨麻郡には巨麻郷は

ない。このことから古代国家が渡来人である高麗^{こま}人^{たち}を甲斐国の北部に移住させ、高麗=巨麻という郡名にして、渡来人を一括して分けていたと推測される。また『続日本紀』霊龜2年（716年）に、甲斐国をはじめ駿河・相模・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人1,799人を武蔵国に移住させ、高麗郡を新たに設置したと記されている。それに加えて『続日本紀』天平宝字2年（758年）に、「帰化の新羅僧30人、尼2人、男19人、女21人を武蔵国の閑地に移す。是に於いて始めて新羅郡を置く」と新羅郡も設置されたことが記されている。このように高麗郡や新羅郡といった郡に集約させて移住させていたことは、東国・坂東社会に中華思想を広めようとした政権の思惑があった可能性が推測される（横浜市歴史博物館編2007）。

他に上野国多胡郡^{こうずけのくに たごぐん}、美濃国席田郡^{みののくに むしろだぐん}、など渡来人を中心とした郡が設置されていたことが『和名類聚抄』^(註7)に記されている。武蔵国高麗郡では常陸産の須恵器が出土し、また宇都宮近辺の遺跡からは新羅系土器（図4）が出土しており、新羅人が移住したことを裏付けている。新羅系土器の出土により、移住させられた新羅人は政治的拠点に一度集住させられて、のちに国内各地に再度移されていたことが考えられる（横浜市歴史博物館編2007）。



図4 新羅系土器

7世紀後半、西下谷田遺跡（栃木県宇都宮市）出土。（横浜市歴史博物館編2007）

後には渡来人も百姓となり、未開地の開拓や防衛施設の運営などを行っていたことも東

北各地の遺跡から出土する渡来系の剣などからわかる（図5）。



図5 金装獅嚙三累環頭太刀柄頭

中央に歯をむき出しにした獅子が表現され、表面は鍍金。獅子と三累環を合わせた形状は国内に例がなく、朝鮮半島製と考えられている。丹後平古墳群（青森県）出土。八戸市博物館所蔵。（東北歴史博物館編 2019）

律令国家が渡来人を東北各地に移住させた痕跡は渡来系の須恵器などで推測できるが、他の目的として関東一円へ仏教の導入を意図した政策とも推測される。つまり東国に新羅僧や尼を移住させることで、東国の人々に中華思想と同時に仏教的思想を植え付け、律令政策に反対する蝦夷を服属させる政策でもあったと考えられる（横浜市歴史博物館編 2007）。

2 城柵と柵戸

7世紀から9世紀にかけて、律令国家の支配拠点として東日本に城柵が造設されていく。城柵は蝦夷や柵戸などの移民統括を目的として設置された。

7世紀中葉、最も初期の城柵の拠点として設営されたのが郡山遺跡である。国府の機能は郡山遺跡から、神亀元年（724年）に多賀城に移転され、8世紀後半以降になると、さらに北への進出を進めて城柵の設置が強行された。城柵は段階的に北へと進められ、城柵設置後はそこに新しい郡が建てられ、律令国家の支配が拡大していく。

1) 律令政策と城柵

律令国家にとって対蝦夷政策を具現化した

のが、古代の城柵であると言える。それは蝦夷の地に城柵・官衙を造設し、城柵の造営に伴い郡が設置されると同時に、その地域には多くの柵戸を移住させた。神護景雲3年（769年）、東国から浮岩の百姓（浮浪の民）2,500人が柵戸として伊治城に配置されたことが『続日本紀』に記されている（東北歴史博物館編 2012）。



図6 蝦夷の居住地と城柵分布図
(永田 2015)

代表的な城柵は平地にあるものとして、郡山遺跡、伊治城（宮城県栗原市）、胆沢城（岩手県奥州市）、志波城（岩手県盛岡市）、徳丹城（岩手県紫波郡）などがあり、また



図7 多賀城政庁跡 第Ⅱ期復元模型

政庁は多賀城内のほぼ中央に位置し、築地塀をめぐらせた内部に主要な殿舎を配置している。第Ⅱ期政庁は天平宝字6年（762年）に藤原朝橘が全面的に改修した政庁である（東北歴史博物館編 2019）。

丘陵地の城柵は多賀城(宮城県多賀城市)、城生柵遺跡(宮城県加美町)、桃生城(宮城県石巻市)、宮沢遺跡(宮城県大崎市)、秋田城(秋田県秋田市)がある。

中でも、東北地方にみられる独特な城柵施設は、多賀城、秋田城などに見られるように国府としての政庁を設けていることであり、政庁では蝦夷の服属・服従を促すと思われる儀式を授けていることである。

秋田城が最北の行政機能を持つことは、戸籍などの行政文書の漆紙文書や木簡などの豊富な出土文字資料により裏付けられ、また同時に武器の集積管理を示す器城帳様漆紙文書や、鎮兵や軍団兵士、軍穀所の存在を示す木簡や墨書土器などが出土している。中でも注目されることは、秋田城の蝦夷に対する^{きようきゆう}饗給の儀式が8世紀末頃に執り行われたことを示す荷札木簡(図8)が出土していることである(東北歴史博物館編2012)。



図8 荷札木簡 図9 「俘囚計帳様文書」漆紙文書
秋田城跡(秋田県秋田市)出土。秋田城跡歴史資料館所蔵。

(東北歴史博物館編2019)

これらは朝貢に訪れた蝦夷に対して、位階や禄物を与える饗給が行われていたことを明確に示している。また、秋田城跡周辺に居住する蝦夷が俘囚となって編戸される過程と伺

える「^{ふしゅうけいちようようもんじよ}俘囚計帳様文書」が漆紙文書(図9)として出土している。文書の年代は9世紀前半と思われ、城柵設置地域に於いて、蝦夷が「俘囚」として段階的に律令体制に組み込まれ、その人身支配が進められていく実態を示している(伊藤2019b)。

同時期に秋田平野周辺の丘陵部にも新たな集落が出現した。移民である柵戸と蝦夷の中で律令政権に服属した俘囚を含み、また柵戸に編入された渡来人も、城柵周辺の住民となり集合集落が設営された。つまり蝦夷と柵戸の両文化の「二極化の融合」が、城柵周辺の集合集落に覗えるのである(藤沢2019)。城柵の周辺では柵戸と蝦夷は「私的な交易も盛行していた」とみられる(熊谷2015)。

2) 城柵と交易

7世紀中葉に坂東文化と俘囚が土器づくりで一部融合されたように、城柵の周辺に誕生した集合集落は、人々の生活物資の物々交換、つまり交易がおこなわれていたと思われ、千城は「城柵では市が開かれていた」可能性を示唆している(千城2013)。

城柵における蝦夷の朝貢は、一方で律令国家との交易の場としての側面を持っていた。8世紀から9世紀にかけて秋田城では城柵内に倉庫群が確認されている。特に焼山地区建物群の規模は南北120mを超え、最北の城柵として、蝦夷への饗給や貢納物収納のための物資を集積する倉庫として使われたものと思われる。

律令では陸奥・出羽・越後三国の国司にのみ付与された権限である「饗給」・「征討」・「斥候」という対蝦夷政策の特別な任務が与えられていた(東北歴史博物館編2012)。饗給とは朝貢してきた蝦夷に対し「贈物や饗宴でもてなす平和的融合策」(伊藤2019a)であり、そうした働きかけに対して蝦夷からは北方の特産品などがもたらされた。経済的交換という側面から見ればこれらは一種の交易であ

り、先に上げた秋田城や城柵を交易拠点として北方交流は展開していったのだろう。征討という軍事的行動は、饗給による交渉が不調に終わった際に用意していた策であったといえる。また、斥候は偵察—搜索であり、饗給でもてなしながら、蝦夷集団の思惑を偵察するというものである。

『延喜式』では、陸奥国交易品として「アザラシやオットセイの皮・北方系犬あるいはラッコの皮・砂金・昆布・索昆布・細昆布」が指定されていた。砂金を除き、東北地方北部や北海道を主産地とする皮革類や昆布類である。その他に、馬・鷹羽・琥珀も蝦夷側の特産品として知られていた。また出羽国では熊皮やクロテン毛皮などが、北海道の人々や渤海国を通してもたらされ、都の貴族社会にもてはやされた需要の高い交易品であった。また、北方への交易品としては東北地方北部や北海道では玉類や刀が好まれ、銭貨である「和同開珎」も流通貨幣としてではなく結びつきの象徴として用いられた(図10)。また律令役人の服装の一部である腰帶金具(ベルト・バックル)は、朝貢の際に着用するため衣服と共に支給されたと考えられる(東北歴史博物館編2012)。



図10 和同開珎
長根Ⅰ遺跡(岩手県宮古市)出土。宮古市教育委員会蔵。
(東北歴史博物館編2010)

城柵の領域外の宮城県北部では7世紀から8世紀ごろの横穴墓や末期古墳の小円墳から玉類や腰帶金具が副葬品とされるようになり、北海道の中部では坂東で製作された須恵器が副葬品として出土している。律令制以前の早い時期から北方交流を知る手掛かりとしては、『日本書紀』斉明4～6年(658年～

660年)に越後守阿倍比羅夫が^{えちごのかみ}大船団を率いて東北地方北部や北海道に赴き、蝦夷と交渉を持ったとする記事がある^(註8)。また、^{あべのひらふ}斉明5年(659年)には「熟蝦夷」が毎年入貢する記事があり、それをものがたるように、当時、国の領域外であった宮城県北部では7世紀後半から8世紀頃の横穴墓や末期古墳の小円墳から玉類や腰帶金具が副葬品として出土していると考えられる(図11・12)(東北歴史博物館編2010)。

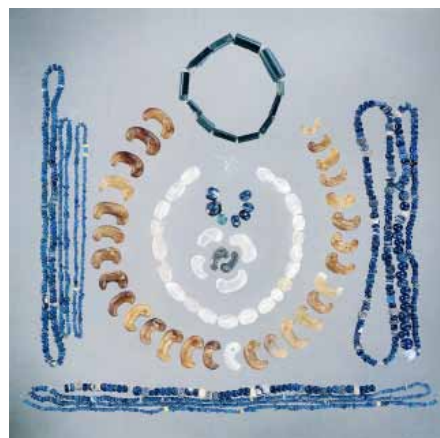


図11 玉類
山根前横穴墓群(宮城県登米市)出土。登米市教育委員会蔵。
(東北歴史博物館編2010)



図12 腰帶金具
鳥矢ガ先古墳群(宮城県栗原市)出土。栗原市教育委員会蔵。
(東北歴史博物館編2010)

しかし、8世紀後半になると北上川流域の志波村(現在の岩手県盛岡周辺)や胆沢地域を中心とする勢力との軍事的衝突が起き、この地に強力な蝦夷勢力が存在していたことが知られている。朝貢制による交易システムは、利害の対立によって容易に敵対する体制に変化するという、極めて流動的な、また緊迫する要素を孕む交易であったと推測される(東北歴史博物館2010)。

このように東北地方では、7世紀後半以降の城柵に係る遺跡が把握されており、8

世紀以降のものについても今日もなお盛んに調査されて、実態の解明が進んでいる。

3) 城柵と蝦夷の反乱

律令国家は、とりわけ8世紀中頃から多賀城以北の大崎平野の北辺に西から東へと向かい、多くの城柵を配置した長大な防衛線を構築した。更にこれらの北側に土塁と堀を数重に巡らせた桃生城と伊治城を造営した(図13)。



図13 多賀城以北の城柵・官衙と防衛ライン
(東北歴史博物館編 2010)

律令国家の対蝦夷政策は多賀城や秋田城にみられるように、饗でもてなし禄を与えるなどの懐柔策をとる一方、彼らの攻撃を予測して、東辺・北辺の地に軍隊を常に駐在させ、防衛機能を備えた城柵を設置し造営を続けた。城柵守備の任務にあたったのは、東国の諸国から徴発された鎮兵と役夫である。鎮兵に充てられた東国の軍団兵士は、天平宝字2年(758年)陸奥国に桃生城、出羽国におかちじょう雄勝城(秋田県横手盆地)を造営するために徴発されて、この時の兵士の数3,000人程と推定される(平川2019)。

また神護景雲2年(767年)には陸奥国これはりじょうに伊治城が造営された。これらを足掛かりと

する律令国家の対蝦夷政策は、やがて7年後の宝亀5年(774年)、律令国家の早急な城柵設置の拡大政策と移民導入によって、高まっていた蝦夷の不満はついに爆発し、桃生城を襲撃した。「三十八年戦争」と呼ばれる国家と蝦夷の戦いの始まりである。



図14 伊治城跡(宮城県栗原市)
外郭北辺には土塁と堀を数重に巡らす構造。
(東北歴史博物館編 2019)

発掘調査の結果、政庁をはじめとして、その周辺の建物や住居を焼失させていたことが分かり、これらは蝦夷の攻撃の激しさを物語るものである(東北歴史博物館編 2010)。

続いて6年後の宝亀11年(780年)、上治郡の大領で、蝦夷に出自を持つ伊治公これはりのきみあざまろ皆麻呂が伊治城において陸奥国守・按察使の紀広純むつのくにのかみと牡鹿郡大領の道嶋大楯あぜちを殺害する事件が起こる。皆麻呂に誘発された蝦夷たちは、律令国家の支配拠点を襲撃しながら多賀城に押し寄せて火を放った。多賀城の火災の痕跡は全体に及んで、政庁内の建物はほとんど焼失したといわれる。大規模で長期的な戦いはこれ



図15 多賀城兵士が使用した武器類
左上から刀、蕨手刀、丸木弓、右：鉄鏃
(東北歴史博物館編 2019)

までにはなく、律令政府は全国に各国内の民衆から兵を徴発し 1,000 人前後で編成する軍団制を導入して蝦夷と戦った（東北歴史博物館編 2019）。

蝦夷の反乱を鎮圧するために征夷大將軍坂上田村麻呂が乗り出し、延暦 21 年（802 年）胆沢地方（岩手県奥州市）に胆沢城を築き東国より浮浪人 4,000 人を胆沢城管下に配置した（平川 2019）。しかし、胆沢城と志波城の造営後、まもなく律令国家の財政は困窮する。延暦 24 年（805 年）桓武天皇は征夷と城柵造営の中止を決断し、弘仁 2 年（811 年）、蝦夷征討政策は幕を閉じる。この戦争は蝦夷に対する継続的で大規模な軍事攻撃であり、蝦夷社会に壊滅的な影響をあたえた。その後律令国家は、国家に服属した蝦夷・俘囚を諸国に分散させて、勢力を分断する政策をとった（東北歴史博物館編 2019）。

6 世紀後半から畿内を中心とした古代国家の造柵と 7 世紀にはじまる領域拡大政策は、9 世紀初頭の「三十八年戦争」の終結で、律令国家による対蝦夷政策と、その軍事的行動も終焉を迎えたのである。

3 古代の歴史の中に存在した蝦夷

しかし、ここで問題が一つ残されている。律令国家の下に「夷狄」とされて卑しめられた蝦夷は、古代の日本列島に住む異族民であったのだろうか。

古代蝦夷については、長い研究の歴史がある。

江戸時代の新井白石や本居宣長の「蝦夷＝アイヌ（エゾ）論」から始まり、明治時代には日本人種論が活発になり、「石器時代人（＝縄文人）アイヌ説」や、「日本人の先祖は弥生人」論、あるいは鳥居龍蔵や喜田貞吉らによって「蝦夷アイヌ説」が論じられ、「蝦夷縄文人末裔説」なども発表された。

昭和初期に、医学系や理学系の人々によって人骨の科学的な研究が盛んになると、蝦夷

アイヌ説を見直しはじめた自然人類学が、人間の形態は歴史的に変化するとして、長谷部言人^{はせべことんど}や清野謙次らが「日本人の先祖は縄文人」とであると説いた。

戦後になると考古学者の伊東信雄が、弥生時代には既に津軽まで稲作が伝播しているという研究を基に、蝦夷は倭人と同様な文化を持っていたと「辺民説」を論じた。また古代史研究の立場から高橋富雄は、蝦夷とは東方の「まつろわぬ人々」を指した政治的観念であり、人種的な相違とは直接関係ないことを説いた。アイヌ語研究者の山田秀三氏は 1970 年に言語学的研究の成果として、「蝦夷非アイヌ説」を論じている。

このように、「蝦夷アイヌ説」や「縄文アイヌ説」「蝦夷縄文末裔説」あるいは「辺民説」など蝦夷の研究は、歴史学・文化人類学・解剖学・文献史学・アイヌ語学・地名学など様々な角度から解釈を加えた研究を経ている。蝦夷とは自称でなく、古代律令体制下の東北地方で国家政策に抵抗する人々を指した政治的観念であり、人種的な相違とは関係なく彼らを一括して呼んだところに端を発するものである。文化的に倭人と異ならない北海道の擦文文化人も含めたすべての「北方に共住していた人々」を指したものであり、今日は「辺民説」が最も主流となって落ち着いている（熊谷 2019）。

おわりに

8 世紀の律令体制下において、北方の支配拡大を目指して関東の坂東から編成され、政策に従わない蝦夷の征討のために移住を強いられた柵戸は、城柵の砦となり、蝦夷の地で戦った。国家が北方に領域を広げるためには対蝦夷政策が急務であった。より北方へと城柵の造設を行い、それと同時に柵戸の導入を繰り返しながら蝦夷の反乱が激化するまで移民政策は続けられた。地域的な変遷と統合を経て、律令体制はいよいよ 10 世紀中ごろか

ら 11 世紀前半にかけて衰退の道をたどり終末を迎えることになった。これ以降は蝦夷と律令国家は、交易を中心とした穏やかな交流へと発展していくことになる。

今回のレポートを執筆するにあたり、何より柵戸、渡来人、俘囚そして浮浪人は、律令国家の拡大政策を支えた人々であり、国家の骨格と体裁を整えた人々であったということが分かった。また、想像していた以上に、古代国家の中で渡来人が多く活躍していたことに驚いた。

そして、発掘調査から出土する土器などの生活道具からは柵戸や渡来人の足跡、生活の歴史を具体的に知ることができた。また、東北各地の遺跡から出土する木簡、墨書土器、漆紙紋書、関東系土器、馬具、鉄器などの考古資料や、『日本書紀』、『続日本紀』、『和名類聚抄』などの文献史料からは、柵戸の足跡、律令国家が領域拡大政策に城柵を造設し続けた歴史があったことが分かり、この地方で何が起きていたのかを窺うことができた。

近年の考古学研究の進展は目覚ましい。とりわけ古代東北史においては、蝦夷自らが書き残した記録が皆無に等しいため、さらなる考古学的研究成果に期待される。それは地中に残された住居跡、墳墓や土器を通して古代蝦夷の生活の一部分を具体的に解明できる強みが考古学的研究にはある。文献史料は、国家の手による記録という特性から「支配者と服属する蝦夷」として記録される傾向が覗われ、誇張や造作が含まれることに注意を払うことを常に心掛けていなければならない。今後の調査研究により、古代蝦夷文化の新たな考古学的発見と解明を期待したい。

……関東から柵戸となり東北の地に移住を強いられた多くの人々は、その後、東北地方を安住の地として住み続けただろうか、また彼の地で穏やかな生活を送ることができたのだろうか。(筆者の独りごと)

註

- (1) 『日本書紀』大化 3 年 (647 年) に、「淳足柵を造り、柵戸を置く」と記されている。これが、東北辺境における城柵と柵戸の初見とされ、柵戸は柵に配置した屯田兵と解釈されている (宇治谷 1988)。淳足柵は、現在の新潟県沼垂にあったと考えられている。
- (2) 東海道の足柄坂以東、東山道、碓井坂以東を坂東八国と呼ばれ、「坂東」はこれらの八国を華夷思想に基づき律令体制下に造られた語であり 10 世紀には消滅する (広辞苑 2008)。
- (3) 朝廷に帰服した蝦夷全般を指す場合もあるが、より狭義には別に朝廷と服属する関係を結んだ蝦夷のことであり、部姓を与えられて多くは城柵の周囲に居住した。集団で朝廷に服属したものは「蝦夷」という身分として、本拠地の地名+「君」、あるいは「公」の姓を得た (例: 伊治公咎麻呂、大墓公阿豆利爲と盤具公母禮など、こうした者の多くは、従来からの居住地に留まった。また服属した蝦夷の軍は「俘軍」として、しばしば朝廷側の武力として活動したが、本文で前述の通り朝廷と蝦夷の利害関係は流動的であったため、時に敵対する諸刃の刃ともなった。服属程度の浅いものは「夷俘」と区別されていた (小学館編 1993)。
- (4) 本籍地を離れ、他所に住んでいる人を言う (平川 2019)。
- (5) 『日本書紀』景行天皇 40 年 10 月 2 日、日本武尊は「荒ぶる蝦夷等」の地を平定するために、「相模から走水海 (浦賀水道) を渡って東に向かおうとしたが、海峡の神が波を起こして、船はグルグル回りするため渡ることができなかった。これは海神の仕業と、弟橘媛が入水すると暴風はすぐに止み、船は無事岸につけられた。そして、海路から葦浦に回って、玉浦を横切って蝦夷の支配地に入った」と記されている (宇治谷 1988)。
- (6) 『日本書紀』齐明天皇 4 年夏 4 月、「阿部臣が船軍百八十艘を率いて蝦夷を討つた。秋田・能代二郡の蝦夷は、遠くから眺めただけで降伏を乞うた」と記されている (宇治谷 1988)。
- (7) 『和名類聚抄』は平安時代中期に造られた辞書である。承平年間 (931 年～938 年)、勤子内親王の求めに応じて源順編纂した。「十卷本」「二十卷本」として区別される。二十卷本は古代律令制における行政区画である

国・郡・郷の名称を網羅している（広辞苑 2008）。

（8）『日本書紀』 齊明天皇の代に、「小錦下坂合部石布連・大山下津守吉祥連らの二艘の船が、呉と唐への航路に遣わされ、その年の 10 月 29 日洛陽についた」と記されている（宇治谷 1988）。

（9）『日本書紀』 齊明 5 年（659 年）に、遣唐使が唐の皇帝から「蝦夷には何種類あるのか」と問われ、「三種類あります。遠い所のものを都加留と名付け、次のものを鹿蝦夷と名付け、一番近いものを熟蝦夷と名付けております。今ここにありますのは熟蝦夷です。毎年日本の朝廷に入貢します」と答えた」と記されている。「都加留」は津軽を指し、「鹿蝦夷」は粗野で朝廷に服属しない遠方の蝦夷で、「熟蝦夷」は物事を良く解釈する蝦夷、つまり朝廷に従順なものと解釈できる（宇治谷 1988）。

引用・参考文献

伊藤武士 2019a「最北の古代城柵と蝦夷社会」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

伊藤武士 2019b「東北の古代城柵 秋田城跡と蝦夷社会」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

宇治谷猛 1988『日本書紀 全現代語訳（上）・（下）』講談社学術文庫

熊谷公男 2015『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館

熊谷公男 2019「古代蝦夷研究の現在」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

2008『広辞苑 第六版』岩波書店

小学館編 1993『日本歴史館』

高橋栄一 2019「秋田地域の城柵について—8 世紀を中心に—」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

千城央 2013『エミシとヤマト』河北出版センター

東北歴史博物館編 2010『多賀城・太宰府と古代の都』展示図録

東北歴史博物館編 2019『蝦夷』展示図録

永田英明 2015「一城柵の設置と新たな蝦夷支配—」『蝦夷と城柵の時代』熊谷公男編 吉川弘文館

横浜市歴史博物館編 2002『東へ西へ 律令国家を支えた古

代東国の人々』展示図録

横浜市歴史博物館編 2007『ヒトが移る モノが動く』展示図録

横浜市歴史博物館編 2010『古代の役所と地域社会』展示図録

平川南 2019『地域に生きる人びと 甲斐国と古代国家』吉川弘文館

藤沢敦 2019 a「古代倭国北縁の軌轢と交流—栗原市入ノ沢遺跡で何が起きたか—」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

藤沢敦 2019b「蝦夷以前の東北—倭国の北縁—」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

村田晃一 2019a「移民を東北へ、蝦夷を全国へ—西へ、東へ— 古代資料から古代移民の時代を考える—」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

村田晃一 2019b「土器・家・ムラからみた蝦夷と柵戸」『東北歴史博物館特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」講座資料』

ことの始まり—イネ（コメ）の始まりを考古学初心者が探る—

木村 俊夫

I. はじめに

物事には、全て始まりがあるはずだ。平素この始まりに、「何故」「どうして」がつきまとう習癖があった。いくら説明されても納得できない、というよりは理解できないのかもしれないが。その中のひとつに「コメ」または「イネ」がある。人類の祖先が食糧は専ら狩猟・漁撈・採集で賄っていた段階から、自ら食糧を生産する手段を得ていく過程で、何故「コメ」（イネ）を使ったのだろうか。先人達は、イネをどのように調理して食糧にしようとしたのだろうか。まさか、実った稲穂を野鳥がついばむように丸呑みしようと思った訳でもないと思うが。

コメを使い始めた頃の野生イネの種子は、現在私たちが目にする肥沃な土地に自生するイネ科雑草の種子と変わらなかったと推測される。更に、野菜や果実の場合は、祖先種であっても採取して、そのまま食べることが出来るものも少なくないと思われるが、コメは今では当たり前の「ご飯」にするまでに炊飯という手間を加えなければならない。このようなコメを、どうして食糧として利用しようとしたのだろうか。その資料に出会いたかった。

今の私たちが見慣れている稲穂を思えば、野生イネの穂はイネ科雑草の穂と差がなく、とても食糧には結びつけられないのが実感だろう。何故このような植物を先人達は主食にしようと思ひ描いたのだろうか。そのイネ（コメ）の始まりにわずかでも近づけたらと思い、探ってみた。

II. イネ（コメ）の始まり

（1）イネの始まり—野生イネ—

現在私たちが水田で見かけるイネは「栽培イネ」と言われ、分類学上イネ科イネ属に属している。このイネも初めから現在の栽培イネの状態で生存していた訳ではなく、祖先があり、この祖先を「野生イネ」と言っている。現在、イネの研究者が認めているイネ科イネ属植物を、石川隆二は表1のように示している（石川 2013）。

表 1

イネの種類	一年生・多年生	分布
オリザ・サティバ <i>Oryza sativa</i> ※アジア栽培イネ	一年生	世界中
オリザ・グラベリマ <i>Oryza glaberrima</i> ※アフリカ栽培イネ	一年生	西アフリカ
オリザ・ルフィボゴン <i>Oryza rufipogon</i> ※オリザ・サティバの祖先種	一年生・多年生	アジアからオセアニア
オリザ・バルシー <i>Oryza barthii</i> ※オリザ・グラベリマの祖先種	一年生	アフリカ
オリザ・ロンギスタミナータ <i>Oryza longistaminata</i>	多年生	アフリカ
オリザ・メリディオナリス <i>Oryza meridionalis</i>	一年生	オセアニア
オリザ・グリュメバチュラ <i>Oryza glumepachula</i>	一年生・多年生	中・南アメリカ
オリザ・オフィシナリス <i>Oryza officinalis</i>	多年生	アジア
オリザ・マイニユータ <i>Oryza minuta</i>	多年生	フィリピン、バブアニューギニア
オリザ・リゾマティス <i>Oryza rhizomatis</i>	多年生	スリランカ
オリザ・エイチンジェリ <i>Oryza eichingeri</i>	多年生	アフリカからスリランカ
オリザ・プンクタータ <i>Oryza punctata</i>	多年生	アフリカ
オリザ・ラティフォリア <i>Oryza latifolia</i>	多年生	中・南アメリカ
オリザ・アルタ <i>Oryza alta</i>	多年生	中・南アメリカ
オリザ・グランディグリュミス <i>Oryza grandiglumis</i>	多年生	南アメリカ
オリザ・オーストラリエンシス <i>Oryza australiensis</i>	一年生・多年生	オーストラリア
オリザ・リドレイ <i>Oryza ridleyi</i>	多年生	アジア、ニューギニア
オリザ・ロンギグリュミス <i>Oryza longiglumis</i>	多年生	ニューギニア
オリザ・グラニウラータ <i>Oryza granulata</i>	多年生	アジア
オリザ・メイリアーナ <i>Oryza meyeriana</i>	多年生	アジア（熱帯島嶼地帯）
オリザ・ブラキアンサ <i>Oryza brachyantha</i>	一年生・多年生	アフリカ
オリザ・スケレチエリ <i>Oryza schlechteri</i>	多年生	ニューギニア

（石川 2013）

また、石川の文献から以下のようにまとめることができる（石川 2013）。

・現在、地球上には 22 種のイネ科イネ属植

物が生息。

・22 種の中で、栽培イネは「オリザ・サティバ (アジアイネ)」 「オリザ・グラベリマ (アフリカイネ)」 の2 種のみで、他の 20 種はすべて野生イネである。

・栽培イネ「オリザ・サティバ」は、日本をはじめ世界各地で栽培されている。その祖先種は、野生イネ「オリザ・ルフィポゴン」である。

・栽培イネ「オリザ・グラベリマ」は、西アフリカの限られた地域でのみ栽培されている。その祖先種は、野生イネ「オリザ・バルシー」である。

・野生イネは、表 1 に示すそれぞれの地域に分布。湿地、湖沼、水田、用水路の畦などに雑草のように自生している。

・日本では現在まで野生イネの自生は確認されていない。

また、熊谷真彦・植田晋太郎によると、以下のようにまとめることができる (熊谷・植田 2011)。

・栽培イネの「オリザ・サティバ」と、祖先種であり最も近縁であるはずの野生イネ「オリザ・ルフィポゴン」には形態や生活史において多くの種内変異が見られる。

・「オリザ・サティバ」は、ジャポニカ型とインディカ型の 2 つの亜種に分かれる。

・ジャポニカ亜種は、温帯および寒冷な地域での栽培に適しているものが多い。

・インディカ亜種は、熱帯地域での栽培に適しているものが多い。

(2) 野生イネから栽培イネへ

20 種の野生イネの中からただ 2 種だけが栽培イネへ進化していった。一部の野生イネについて生育時の姿、穂 (籾) の様子を図 1 および図 2 に示した。野生イネ間でも草型や籾型にかなりの違いが見られ、栽培イネとではその差が明瞭である。

佐藤洋一郎は、野生イネと栽培イネの違い

を表 2 のようにまとめている (佐藤 2003)。

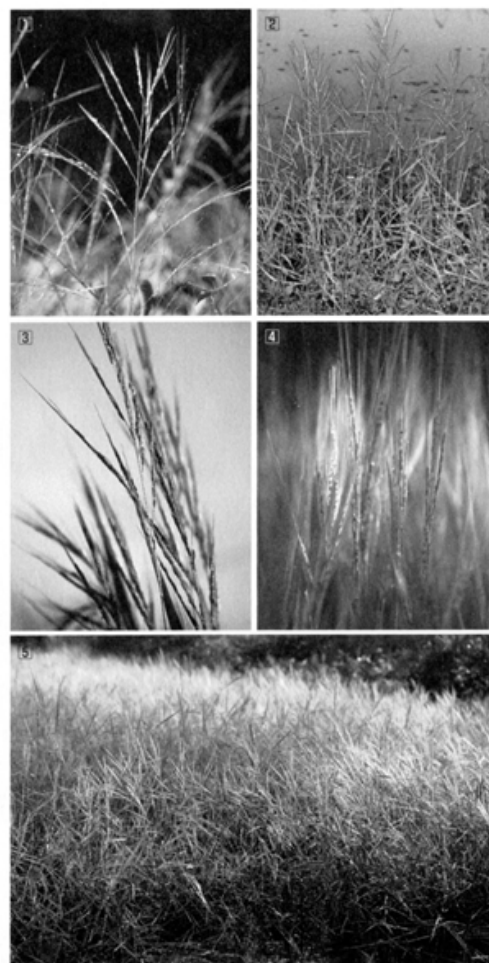


図 1 野生イネの穂

①タイ・アユタヤで ②中国・江西省で ③タイで
④実験用の温室のなかで ⑤カンボジア・プノンペンで
(佐藤・赤坂 2013)

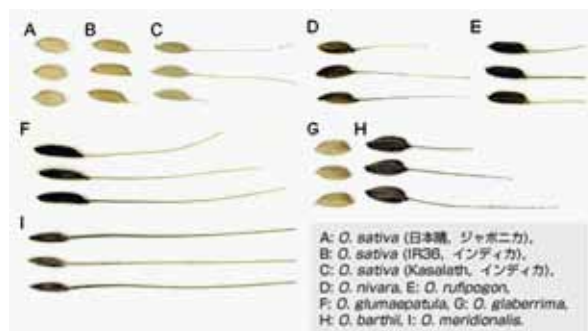


図 2 イネ属 A ゲノム種の多様性 (籾の形態を例に示した)
(新農業展開ゲノムプロジェクト HP)

表 2

性質	野生イネ	栽培イネ
種子の脱粒	あり	弱またはなし
休眠性	強い	弱またはなし
種子のサイズ	一般に小 (変異も小)	大型化 (変異が拡大)
色 (玄米)	有色 (赤)	多くは脱色
色 (籾殻)	黒	多くは脱色
のげ	あり	ないものが多い
のげの鋸歯	よく発達	退化またはなし

(佐藤 2003)

また中山誠二は、一般に穀物を主とする栽培植物には次のような「栽培化症候群」と呼ばれる適応現象が見られ、植物の遺伝形質的な変化であるとし、以下の5つの項目の形質変化が重要としている（中山 2019）。

- ①非脱粒性の出現
- ②発芽抑制（休眠性）
- ③種子の大型化
- ④完熟期の同時性
- ⑤つる性から草性へ

石川隆二は、栽培イネ化には、5項目の中でも「非脱粒性」と「発芽抑制（休眠性）」の2項目が必須としている。脱粒性とは「イネの籾が成熟するに従って穂から自然にはなれ、地面にまき散らせる性質で、捕食者からの危険を回避し次代を残す」ことであるとし、栽培イネにとっては「脱粒性の消失は必須の形質となる」としている。また、発芽抑制（休眠性）については、「雨季、乾季のあるモンスーン地帯に生息していた野生イネの籾は乾季の始まり頃に脱粒して地上に落ち、次の雨季まで発芽しないで季節をやり過ごす重要な形質である。しかし、栽培イネにとっては一定の発芽と開花の斉一性は栽培を効率的に進めるためには重要な形質である」としている（石川 2013）。

この野生イネが何時、何処で栽培イネに進化したのだろうか。水田稲作の起源を探るに当たっては遺跡から、イネが栽培された水田跡、イネの遺体、耕作に使用された農具等の出土が要件となる（森島 1983、佐藤 2018）。

9,000～8,000年前頃の中国・長江の中・下流域の遺跡から、野生イネか栽培イネか不明のイネ遺物出土の記録が増え始める。6,900～6,600年前頃になると、野生イネより栽培イネの遺物出土が多くなり、このころには栽培イネが定着していたことが分かる（那須 2014）。

森島啓子は、栽培イネの起源地を考古学的

に証明することについて、「温帯植物、熱帯植物の化石などの資料が乏しいので、考古学的に栽培イネ化の時代や場所を推定することは難しい」とし、「栽培イネの起源地とするには少なくとも過去において野生イネが存在し、そこから原始的な（最初の）栽培イネへ分化するのに必要とされるだけの生態的、遺伝学的な条件が備わっていなければならないが、このような条件を満たす場所は多数ある」とその困難さを指摘している（森島 1983）。

だが、現代においては栽培イネの系統を解析する手法が進化しており、倉田のり・久保孝彦が、アジア各地から採集した野生イネ（ルフィポゴン）446系統と栽培イネ（サティバ）1083系統について、ゲノム解読とデーター解析を行っている。その結果、ジャポニカ亜種の最も古い系統、ジャポニカ亜種の系統につながる野生イネ、更に、インディカ亜種の系統、インディカ亜種につながる野生イネの系統の生息地の起源がすべて同じ中国の珠江中流域であることが判明した。これらの結果から、珠江の中流域において、野生イネが「倒れにくい」、「実が落ちにくい」といった栽培イネに適した形質を獲得し、栽培イネへの道を歩み出したと考えられている（倉田・久保 2012）。

II. 日本列島へのイネの渡来

（1）日本列島へのイネの渡来

この栽培イネはどのようにして日本列島へ渡来したのだろうか。主に、以下の3つが提唱されている（図3、藤尾 2015）。

- ・中国から東シナ海を渡ってくる直接渡來說
- ・沖縄から島伝いに北上してくる南西諸島ルート説
- ・朝鮮半島南部経由説

各ルートは専門領域によりそれぞれの主張に隔たりがあり、複雑な様相を呈している。そのため、ここでは、藤尾により、渡来ルート、日本列島での拡散ルート、仙台平野へのルー

ト全てが示されている朝鮮半島南部經由説に従って話を進める。

藤尾慎一郎は、「朝鮮半島南部では紀元前13世紀にはすでに本格的な畑作が始まっており、紀元前11世紀に始まった水田稲作が発展し、農耕社会が成立すると村の有力者とそれ以外の人という身分の差が顕在化してくる。こうした社会の変化が農耕社会に内部矛盾を生じさせると、そこから逃れようとする人々が現れるようになった」と述べている。この人たちの一部が北部九州を目指したものと藤尾は推測し、この渡来民によってイネの種子や水田稲作の技術が持ち込まれたと考えている（藤尾 2015）。

（2）日本列島での水田稲作の定着と拡散

日本列島の水田稲作は、およそ2900年前の縄文時代晩期後半に北九州で始まったとされている（那須 2014）。須藤隆は、「佐賀県唐津の菜畑遺跡から日本最古の水田と水路の跡が発見され、大量の遺物が出土し、縄文時代晩期後半には水田稲作が行われ始めていたことが明らかになった」としており、「縄文時代晩期終末になると、北九州各地で水田稲作を行う初期農耕集落が発達してくる。これは各遺跡から生活に関連する土器と共に木製農具、石庖丁、炭化米などが包含層や水田、水路跡から出土しており、水稻栽培が定着し始めたことを示している」としている（須藤 1999）。

「北九州の玄界灘沿岸に水田稲作の技術と共に渡来した朝鮮半島南部の渡来民は水田稲作を生活の中心にして暮らしていた人たちである。しかし、コメという特定の作物のみに依存する生活には危険が伴っていた。一方、縄文後・晩期からこの地で暮らしていた在来民は、特定の食料に頼らずに採集、狩猟、漁撈などあらゆる食料獲得手段を駆使して生活する点に特徴があった」と藤尾は述べている（藤尾 2015）。

この在来民にとって恵まれた森林や草原は生存のための狩猟・採集の場であった。一方稲作民にとっては、稲作農耕を行うことが生業であった。この間に異民族である稲作民は在来民に稲作技術を伝授しなかったのだろうか、あるいは在来民は稲作技術を受け入れなかったのだろうか。

藤尾は早良平野における室見川流域を例に次のように述べている。「在来民がこの地にすみ着いてから縄文海進が進み、海水面が上昇し、彼らは本拠地を室見川の中・上流域に移していった。湿地帯となった下流域は在来民にとっては魅力のない地域に変わってしまった。湿地帯の下流域には水田稲作民が進出し水田稲作を始めた。稲作が定着する頃になると在来民の中から下流域に移り水田稲作を始める者が現れるようになった。こうした状況は九州北部だけではなく九州から関東南部までの地域に一般的にみられる現象であった」としている。しかし、「水田稲作が定着してくると朝鮮半島の場合と同様に民族間を問わず水田稲作を行う水や土地をめぐる戦いとなった。このように社会に質的な変化が起こった紀元前9世紀後半に農耕社会が成立したと理解される」（藤尾 2015）。

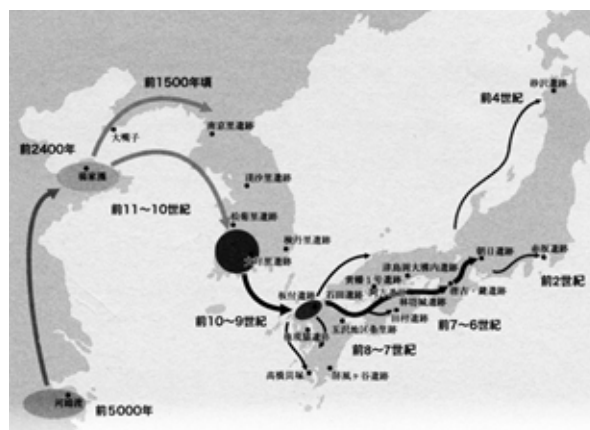


図3 水田稲作の拡散ルート
（藤尾 2015）

一方、水田稲作農耕は約250年もの間玄界灘沿岸地域に止まり、日本列島に拡散しなかった。しかし、紀元前8世紀の終わり頃から図3に示すようなルートで水田稲作の

拡散が始まった。まず、「九州東部や中部でも本格的な水田稲作が行われ、四国・香川以西の瀬戸内沿岸から徳島へ、近畿では神戸、奈良盆地と進み紀元前6世紀中頃には伊勢湾沿岸に到達した。伊勢湾沿岸から先は近畿の日本海側を経由して北上し、紀元前4世紀前葉には弘前に到達し、以降紀元前4世紀代には仙台平野、いわき地域に水田稲作が拡散していった。伊勢湾沿岸からのもう一方のルートは紀元前3世紀になってから中部高地、関東南部に到達した。山陰側では紀元前7世紀前葉に鳥取平野に到達している」(藤尾 2015)。

(3) 仙台平野での水田稲作の始まり

東北地域への稲作の伝来は、伊勢湾沿岸に達した水田稲作が紀元前400年頃若狭湾付近から日本海を北上し一気に津軽・砂沢遺跡に到達、この後に仙台平野に水田稲作が南下したと考えられている(藤尾 2015)。須藤隆によれば、「東北地方における弥生文化の成立、農耕社会の出現は、これまで紀元前100年頃弥生時代中期になってからのことと考えられていたが、1980年代頃からの調査・研究によって紀元前200年前後の弥生時代前期には東北地方の北部において水田稲作が行われていたことが明らかになってきた。仙台平野でも稲作を基調とする弥生文化の成立は弥生時代前期に遡る」ことがわかってきた(須藤 1999)。

仙台平野での水田稲作の始まりについて触れてみたい。「弥生時代の仙台平野の環境は縄文時代後期以降に繰り返された海面の上昇と低下は、低湿地の水位上昇による湿地帯の拡大と、水位の低下による湿地帯の縮小や移動に密接に関わっていた。縄文時代の人々の生活の場が丘陵地の河川沿いであったのに対し、弥生時代の人々は生活の場を平野部に移した」(太田 1999)。

仙台平野での遺跡で水田稲作に係る2遺跡

について、仙台市史と発掘調査報告書から以下のようにまとめる(仙台市史 1999、仙台市教育委員会編 1991・1996)。

●富沢遺跡(仙台市太白区富沢、泉崎、長町南等)

富沢遺跡の泉崎地区から弥生時代中期前半に掘削されたとされる灌漑水路が発掘されたことから、この地での水田稲作は弥生時代中期には始まっていることが推定された。水路の幅は2～3m、深さ1m程、55mにわたって発掘された。溝の堆積土や水田畦の下層土から出土した土器、木製農具(図4)からこの水路は弥生時代中期前半には掘削され機能していたと考えられた。

この水路跡についてはその後も調査が続けられ、約250mも離れた箇所から発掘され、この地域の灌漑用の基幹水路の役割を果たし、繰り返し改修されて機能していたものと思われる。また、水田は基幹水路と地形の高低差や傾斜を巧みに利用し、自然堤防や後背湿地をうまく利用して造成されていた。

●中在家南遺跡(仙台市若林区荒井)

幅20～30m、深さ2mに達する旧河道が西から東北東に300m以上にわたって大きく蛇行しながら伸びているところが発掘された。この旧河道の岸から河床にかけて堆積した層には多くの遺物が含まれており、特に下層14、15層から大量の土器、石器、骨角器、木製品、植物遺存体、動物遺存体等が出土し、わずかながら縄文時代晩期末の深鉢や弥生時代前期後半の高坏の破片が出土している。農具については、木製鍬、泥除、鋤、打棒、竪杵、臼、石庖丁などが出土している(図4)。これらはそれぞれ器種の大きさも揃い、著しく定型的であることから農耕民の生活様式は弥生時

代中期には確立していたものと思われる。



図4 弥生時代の木製農具
1・6：富沢遺跡、2～5中在家南遺跡
(仙台市史 1999 より引用)

この二つの遺跡から次のような特徴を感じた。富沢遺跡は粘土質で低湿地の排水不良な水田である。緩斜面を利用して大区画を作り、畦で一定方向に区画し、更に5～30㎡くらいの小区画水田を造成している。これは東北地方故の低温や低水温からイネを守るための工夫といわれている。用水には湧水を使った例もあり、用水を小区画水田にまわして水温を上げてイネを保護するものである。一方、中在家南遺跡では旧河道が発掘され、その河床や堆積層からおびただしい石器、土器、木製品が出土している。その中に、注目される木製農具が含まれていた。広鍬に機能を持たない複雑な形状の装飾が施されており、泥除

と組み合わせて機能させるものである(図4の2広鍬)。辛い農作業ではあるが、農具に装飾を施すという気持ちにゆとりのようなものを感じた。

また、仙台平野での稲作を藤尾は次のように述べている。「青森の砂沢遺跡での水田稲作は10年ほどで、その後に始まった垂柳遺跡は300年ほど稲作を続けたが、大洪水で埋没すると稲作を止めてしまった。これに対し仙台平野は同じ東北でも、自然災害に遭遇しても改修したり他に移って稲作を続けているというところに大きな違いがある」と。名取川や広瀬川などが形成した仙台平野では、弥生時代中期には水田農耕社会は急速に発展したと言われている。水田稲作の技術向上は農耕集落の発展を支え続けたものと考え

る。出土した農具類を見ると、自分が幼かったころに見ていた農具と基本的な形態に差のない事にただ感心させられる。何故この形が作業しやすいことに気づいたのだろうか。現代人も、稲作を始めた頃の人々からさほど進化していないのではと感じた。

イネの栽培で、出土した農具から思いめぐらして、農耕の初期のころはイネの種子を直接水田に撒き散らしていたのだらうと想像するが、何がきっかけで苗代で育苗する技術を知ることになったのだろうか。ことの始まりの主要な部分の疑問が残されてしまった。

しかし、「イネ」そのものの栽培化に関する歩みについては本文で少し触れたように、イネ自体は遺跡にほとんど残らない。そのため、研究者も遺跡からのメッセージを読み取れずにもがいているような気がする。

IV まとめ

野生イネが、どこでどのように栽培イネに進化したのかをテーマに掲げた。言われるまでもなく、身の程知らずのことではあるが。まとめようとして気づいたことは、食糧とし

ての「イネ」を利用する人々が「イネ」を使ってどのように歴史を作り上げてきたのかということと、植物としての「イネ」が野生イネからより食糧に適した栽培イネに進化してゆく歴史ということとを混同させてしまい、抜き差しならぬ迷路に迷い込んでしまったことである。

イネ科雑草の種子にも劣るような野生イネの粒をどのように利用できたのか。なぜそのようなものに当時の人々は注目したのか。現代人がそれを問うなら、現在でも野生イネを利用する民族がいるとのことなので、そこに住み着いて観察・調査すべきことだろう。碩学の著書から抜き取ろう等とは、余りにも稚拙に過ぎたことである。

1年前より疑問が増えたこと、疑問の持ち方に変化があったことがせめてもの収穫であった。「野生イネ」「中国長江中・下流域」「朝鮮半島南部」「水田稲作渡来民」「玄界灘・九州北部」……という言葉が今後の思索の手がかりになってくれると確信している。これらの言葉の1つ1つに始まりが今も生きているはずだ。20種の野生イネの中からただ2種だけが栽培イネに進化し、しかもそのうちの1種が世界に拡散し、その中でたまたま中国珠江（または長江）の中・下流域で育ち朝鮮半島南部を経て九州北部へ渡来した。弥生人は、どのようなマップを広げたのだろうか。イネは、いくつかのルートに分かれて日本列島を拡散していった。「ジャポニカ」という誉れ高き名前を戴き、更には「ササニシキ」や「ヒトメボレ」などの芸名らしき名前の重荷を背負いながら、長い坂道を登り続けている。イネの碩学に主張の隔たりがあり、参考文献の引用には難しさを感じた。

また、調べていく中で、弥生時代の唐古・鍵遺跡（奈良県）や千種遺跡（新潟県）から出土した土器内に炭化した飯塊が認められることや弥生時代中～後期の真田北金目遺跡、九門寺遺跡（神奈川県）、杉谷チャノバタケ

遺跡（石川県）からおにぎりを連想させる形の炭化した飯塊が出土していることが分かった（横浜市歴史博物館2019）。このことから、弥生時代中～後期には、ご飯をおにぎりの原形のような形で利用することもあったものと推測される。また、現在でも中国南部やインドシナ半島の一地域には古くからコメの粉を麺状にして主食とする地域も知られている（佐藤2018）。この他にも、コメの主食としての利用方法はあると思われるが、コメを食糧とするその「きっかけ」には、今回は辿り着けなかった。

最後に気になった一言を。

イネ学者の池橋宏氏が東南アジアで調査の折、野生イネとの初対面の感想が「それは食糧としては余りにも貧弱であり、苦勞して栽培するのに値するののか」という疑問を消すことができなかった」であった（池橋2005）。この一言を見た時に、現在栽培され、見慣れている「イネ」に比較して、祖先の野生イネがあまりにも貧弱であるのに、当時の人々はどんな気持ちで野生イネに主食糧になってほしいとの希望を託したのだろうかという感想を持った。

一年間、思いがけず考古学などという未知の分野の勉強をさせて頂き感謝申し上げます。地底の森ミュージアムの先生、特に鈴木先生には手とり足とりのご指導に感謝申し上げます。認知終末高齢者を皆さんと同じレベルへ引き上げようと助けてくださったクラスメートにただ感謝です。

引用・参考文献

- 池橋宏 2005 『稲作の起源—イネ学から考古学への挑戦—』
講談社
- 石川隆二 2013 「国境を越えて—イネをめぐるフィールド研究」『イネの歴史を探る』玉川大学出版部
- 太田昭夫 1999 『仙台市史 通史編 I 原始』
仙台市史編さん室
- 倉田のり・久保孝彦 2012 「イネの栽培化の起源がゲノムの全域における変異比較解析により判明した」
『Nature 490 : 497 — 501』
- 熊谷真彦・植田晋太郎 2011 「イネの遺伝的多様性 DNA 分析による研究」『考古学を科学する』臨川書店
- 佐藤洋一郎・赤坂憲雄 2013 「野生イネとの邂逅」『イネの歴史を探る』玉川大学出版部
- 佐藤洋一郎 2003 『イネの文明—人類はいつ稲を手にしたか』
PHP 研究所
- 佐藤洋一郎 2018 『稲の日本史』KADOKAWA
新農業展開ゲノムプロジェクトHP
<http://www.naro.affrc.go.jp/archive/nias/cropgenome/kenkyu/shin-nougyou.html> (2020 年 1 月 20 日閲覧)
- 須藤隆 1999 『仙台市史 通史編 I 原始』
仙台市史編さん室
- 仙台市教育委員会編 1966 『中在家南遺跡他』仙台市荒井土
地区画整理事業遺跡発掘調査報告書
- 仙台市教育委員会編 1991 『富沢遺跡—第 30 次調査報告書
第 1 分冊—』仙台市文化財調査報告書
第 149 集
- 田中正武 1976 『栽培植物の起源』日本放送出版協会
- 中尾佐助 1966 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 中山誠二 2019 「縄文時代に農耕はあったのか」『考古学講義』
筑摩書房
- 那須浩郎 2014 「イネと出会った縄文人—縄文時代から弥生へ—」『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新
泉社
- 藤原宏志 1998 『稲作の起源を探る』岩波書店
- 藤尾慎一郎 2015 『弥生時代の歴史』講談社
- 森島啓子 1983 「イネの祖先を探る」『日本醸造協会雑誌
78 : 680 — 683』
- 横浜市歴史博物館監修 2019 『おにぎりの文化史 おにぎり
はじめて物語』河出書房新社

土器との対話—高柳遺跡出土の渦巻文土器

島村 幸子

1. はじめに一渦巻文土器との出会い

縄文時代は1万年以上も続き、その間縄文土器（以下土器）は人々の日常生活を支える道具として様々に工夫された。これまで発掘された土器は、古代と現代を結ぶ懸け橋になっている。

4年前、地底の森ミュージアムで開催された企画展で高柳遺跡（仙台市泉区）出土の土器を見る機会があった。いくつかの土器の中に大木8b式と呼ばれる大変印象深い土器があった（第1図）。その土器には口縁部の中ほどに立体的な渦巻が表現されており、その左右には内部が空洞になった2つの突起がついていた。真後ろにもう一つの突起があると仮定し、合計5つの突起があると想像した。さらに別の角度から細かく見ると（第2図）、左右の突起は渦巻文による中空の立体的な突起であり、続く胴部には伸びやかな勢いのある渦巻が表現されていることが分かった。私には、この土器の口縁部の渦巻が何かしらのメッセージや伝言を発しているように見えた。また、胴部の渦巻は蕨やゼンマイのような植物を思わせ、大気の流れを力強く表現しているように見え、この土器が非常に印象に残ったのである。その後、高柳遺跡の発掘調査報告書（以下報告書）の中に、この土器（第3図）を見つけた。

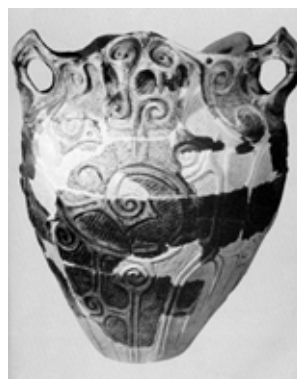
渦巻を見た時に、現代の私たちはどんなイメージを持つのだろうか。筆者の周辺で聞き取りをしたところ、「エネルギー・無限性・運命・力強さ・自然災害・台風の目・創造性・不可能……」と多様なイメージを感じている。縄文時代の人々は、渦巻にどんな印象を持っていたのだろうか。また、どのような過程を経てこれらの渦巻の文様を持つ土器が作られ

たのだろうか。そのことに興味が湧き、口縁部と胴部の文様の特徴をたどりながら考察しようと考えた。

なお、ここでは仙台市史と報告書を参考に、「一つの土器全体が隆線と沈線による渦巻文で施文され、口縁部には主に中空で立体的な突起を持つ土器」を渦巻文土器と呼ぶこととする。



第1・2図 地底の森ミュージアム平成27年度企画展「やきものの歴史」（筆者撮影）



第3図 高柳遺跡出土土器

2. 高柳遺跡の土器にみる渦巻文

高柳遺跡の渦巻文が表現された土器は、どのような過程で作られていったのだろうか。また、高柳遺跡で見つかった土器を作った人々は、どのような印象を渦巻に抱いていたのだろうか。それを見ていく前に、まずは大木8b式土器について触れたい。

(1) 大木 8b 式土器について

縄文時代中期(約 5000 ～ 4000 年前)は、新潟県の火焰型土器及び長野県の顔面付深鉢や有孔罎付土器(第 4 図)などのように、全国的にも地域性が強く独創的で装飾的な大型の土器が作られていた。東北地方南部は大木式と呼ばれる土器の分布圏(第 5 図)で、大木 8b 式の深鉢は縄文時代中期中葉に属している。特徴は器形がキャリパー形で、器体には隆線や沈線による渦巻が伸びやかに展開され、口縁部に立体的に文様が表現され、胴部と連結する文様も見られる。仙台市内では主に七北田川流域の高柳遺跡や名取川流域の上野遺跡(仙台市太白区)等に出土し、両遺跡とも河岸段丘上に立地し、周囲には渦巻文土器を使う以前の古くからの集落が点在している。



①火焰型土器(沖ノ原遺跡 新潟県中魚沼郡津南町)



②顔面付深鉢(海戸遺跡 長野県岡谷市)



③有孔罎付土器(藤内遺跡 長野県諏訪郡富士見町)

第 4 図



第 5 図 縄文時代中期にみられる土器圏

(2) 高柳遺跡出土土器にみる渦巻文

第 6 図の①と②は仙台市教育委員会文化財課向田整理収蔵室で直接見せていただいた土器胴部である。

①は、器面が摩耗しているせいもあると思うが渦巻文が平面的である。しかし②は、所々に渦巻が立体的に施文されている。筆者実測で直径約 3 c m ・高さ 2 c m 弱・下に伸びた 2 本の隆線まで入ると、全長 10 c m 弱の小さい渦巻文である。しかし、私は胴部に突起があったのでは煮炊きの際に障害になったのではないかと思い、胴部は平面的な渦巻文へ、口縁部は立体的な渦巻文へと発展していったのではないかと考え、各々の工程を推察してみた。

資料は高柳遺跡の報告書の中の写真や図と、筆者が撮影した写真を使用した。また、今回は土器の詳細な年代については触れず、渦巻文のみに注目する。



第 6 図①(筆者撮影)



第6図②（筆者撮影）

●口縁部の渦巻文様

前述したように、胴部に表現された渦巻文が口縁部に見られる中空の立体的な突起へと変化していったのではないかと仮定し、渦巻文が特徴的である4つの異なった土器の口縁部を取り上げ、各々ができるまでの変化を推察した。

最初に、第7図④の立体的中空突起へと変化するまでの工程を推察する。

第7図①は縄目の土器口縁部を大小の渦巻文2本の隆線が横に繋いでいる。だが、渦巻の下に明確な中空は見られない。②では渦巻文を2本の隆線で支えている。①に比べ、渦巻の内側のくぼみが大きくなっている。③では渦巻文を中央に据え、両側にしっかりした空間が出来て中空になっている。この中空部分は、②のくぼみが空間として発展して作られているのではないだろうか。④は上下2つの渦巻を隆線が支え内部は中空となっている。両隣の同様の突起と、隆線で繋がっている。



第7図①



第7図②



第7図③



第7図④

次に、第8図④の渦巻を強調した土器へ変化するまでの工程を推察する。

第8図①と②は渦巻文そのものが太く表現されている。①と②の渦巻は、深い沈線で次の渦巻に繋がっていくと仮定し、③のように突起が複数ある口縁に変化するのではないかと考える。

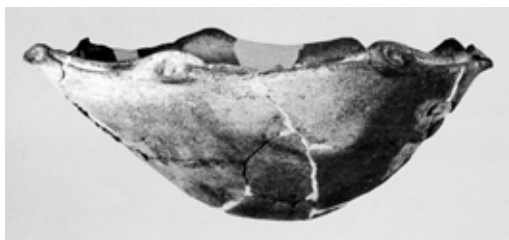
③では浅鉢の口縁部に小さい8個の渦巻文がある。④では中空で立体的な突起が八方に突き出している。これには、土器の製作者の渦巻表現への強い意志が現れているのではないかと考える。



第8図①



第8図②



第8図③



第8図④

続いて、第9図③の渦巻文へと変化するまでの工程を推察する。

第9図①は渦巻文が上下に位置し、その間を曲がった隆線が横から入って上下を区切っている。②は口縁部の幾つかの渦巻から胴部の渦巻へ隆線が一気に流れ細長い渦巻文を作っている。③は口縁部中位に縄目の地文の上に渦巻文が繋がりあって立体的な突起を作っている。右側に見える突起が中空となっていることから、中ほどにあるこの突起も中空と考えられる。



第9図①



第9図②



第9図③（第3図の口縁部を拡大）

最後に、第10図⑤の大きい穴の開いた突起へと変化するまでの工程を推察する。ここでは、渦巻文ではなく、中空部分に注目してみたい。

第10図①は、隆線で作られた文様で、図中央に浅くくぼんだ縦長の四角形がある。②は主に太い隆線で作られ、中央のくぼみが台形になり、①に比べると文様に工夫があるように見える。③は、四角形の文様が太い隆線と沈線で作られ、内部は中空で突起のように見える。④は隆線と沈線の渦巻文で作られた三角形の突起の中央に穴が開いている。そして口縁部の中空の立体的な突起が土器頸部の無文帯と繋がっている。⑤は土器の中では胴部の大きさから考えると、かなり大きい口縁部と思われる。渦巻文による台形の中央突起とその中央に開けられた大きい穴が威圧的に感じられる。また口縁部が胴部の文様に直接続いている。



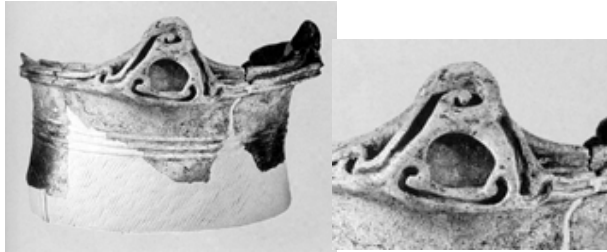
第10図①



第10図②



第 10 図③



第 10 図④
(左：全体、右：口縁部の拡大)



第 10 図⑤

高柳遺跡の資料に注目し、口縁部に表現されている渦巻文をみてきた。報告書の資料を辿りながら変化を自分なりに想像し推察してみたところ、第 7 図～第 10 図に共通していることは、平面から立体になる中で、渦巻の表現が小さく単調なものから大きく外側に突き出すように変化し、強調されている点である。土器を作った人による何らかのメッセージが、こうした渦巻の強調に現れているのではないだろうか。また、渦巻文による立体的な中空突起には、一つの変化だけでなく、各々の変化があったと考えられる。同じムラの中で、土器を作る人たちの交流によって、お互いの様々な技法や文様が互いに交じりあい、刺激し融合しあって、それぞれ特色ある渦巻文の中空の突起が多数作られていったのではないかと考える。

●胴部の渦巻文様

今度は、胴部の渦巻文様に目を向けたい。

ここでは器形や文様の類似した 4 点を取り上げた（第 11 図①～④）。①から④に共通しているのは、器形がキャリパー形という点であり、胴部に大きな渦巻文が装飾され、そこから伸びた隆線が次の渦巻へと続いている点である。また、大きな渦巻の下には小さな渦巻が付いており、2 本の隆線が真っすぐ下に伸びている。

こうした土器の形と文様が、私には女性の身体を現わしているように思えた。

大きな渦巻文で装飾された胴部が、子を宿した女性の腹部を表しているように見え、大きな渦巻の下の小さな渦巻は子宮のようであり、2 本の隆線は産道を表しているかのようであり、外界へと繋がっているように感じられた。

女性の身体（出産）を表していると考えられる土器が津金御所前遺跡（長野県北杜市）で見つまっている（第 12 図）。この土器では母親と思われる顔が土器口縁部に内側を向いてつけられており、子どもと思われる顔が胴（腹）部に外向きにつけられている。下方には空間を残した構成となっている。こうした胴部の表現には、出産に対する畏敬の念が込められているのではないだろうか。

この土器と同じように、高柳遺跡のキャリパー形の土器も女性の身体を現わしているのではないだろうか。



第 11 図①



第 11 図②



第 11 図③



第 11 図④（第 3 図と同じ土器）



第 12 図 女性の出産を表していると考えられる土器
（津金御所前遺跡 長野県北杜市）

●まとめ

第 13 図の土器の口縁部突起は外に大きく張り出し、大・中・小の渦巻文で繋がれている。胴（腹）部の渦巻文は縦方向に延びて口縁部と繋がり、隆線は太くシンプルに表現されている。口縁部の突起が大きく張り出したこの土器全体のバランスは不安定に見えるが、渦巻文の立体的な中空突起の表現がここに極まっているように、私には感じられる。

縄文時代は呪術と祭祀の時代であったと言われ、シャーマンが重要な位置を占めていたと思われる。このような状況の中で、縄文土器は女性が作っていたと考えられている。小林達雄は、「土器の器面に施されたこれらの文様は、装飾するというよりむしろ、土器の現実的な機能とは直接関係のない、ある事実を表現するものであったことを示唆している」と語っている（小林 1980^{（註1）}）。

私は、この「ある事実」とは、自然災害に関することではないかと考える。高柳遺跡は、前述のように河岸段丘上に位置している。近くを流れる七北田川は大雨や台風によって増水し、人々に多大な被害を与えることもあったのではないだろうか。渦巻を、台風や荒れる水面の表現と考えることはできないだろうか。そして、その時の経験や教訓を後世に伝えるために、土器に表現したのではないだろうか。



第 13 図 高柳遺跡出土土器（仙台市泉区）

3. 終わりに

高柳遺跡の渦巻文を持つ土器について、土器の口縁部と胴部の両面から私見を記してきた。資料をみていく中で、土器の文様には各々の役目があると感じた。胴部は作り手やその周囲の人々の内包する考えや問題・想いを表現する内面的役目を、口縁部はその想いに基づいた伝言やメッセージを外に発するメディアとしての外的役目をそれぞれ持っていたのではないかと。

さらに全体として一つの土器を見た時、第11図①には土器頸部に無文帯があり、第1図、第13図には見られない。土器口縁部から胴部へ文様が一気に繋がっている。これなどは単に造形上の問題だけではなく、緊張や緊迫感、勢いを反映しての表現ではないかと考えた。



①深鉢（中ノ内B遺跡 宮城県川崎町）



②深鉢（上野遺跡 宮城県仙台市）



③深鉢（落合遺跡 山形県村山市）

第14図

私はこれまでどうしても口縁部の文様の派手さに目がいきがちだったが、胴部にも大きな意味があることや土器全体の渦巻文のデフォルメにも意味があることを感じ、学ばせられた。

高柳遺跡の口縁部に類似した渦巻文土器が、上野遺跡（仙台市）、中ノ内B遺跡（宮城県川崎町）、落合遺跡（山形県村山市）で出土している（第14図）。

こうしたことから、人と人との交流やネットワークがあって、土器を通して様々な情報が共有されていたと考えられる。生活を支える道具として土器が割れないように、ひびが入らないための技術を伝える会話があり、また高柳の人々は身の回りに起きた自然の恵みに関連した事、出産の喜びや悲しみ、自然災害の恐怖などの事実を共通の認識とし、生きることへのメッセージを人間共通の感情を内包する渦巻に託し、アレンジやデフォルメに工夫を重ね、渦巻文土器を作っていたと考えた。これらの高柳遺跡の土器や同時代の縄文時代中期の土器には、人々の感情を共有し合い、連帯を強め、深める役割も担うものであったと私は推察している。

今回のレポートでは、土器の詳細な年代については触れずに進めてきたが、実際には縄文時代中期中葉という中にも細かい年代の違いがあり、それを見ていくことで、高柳遺跡や縄文時代中期の土器に描かれている渦巻をはじめとした文様の変化やそこに込められた想いを、より理解できるのではないだろうか。今後の課題としていきたい。

図版引用

第1・2・6図は筆者撮影

第3図 仙台市教育委員会編 1995『高柳遺跡 本文・写真・図版編』仙台市文化財調査報告書第190集

第4図 ①東北歴史博物館編 2000『春季特別展 縄文時代の日本列島—自然と共生—』

②、③芹沢長介 1975『陶磁大系 I 縄文』平凡社

第5図 東北歴史博物館編 2000『春季特別展縄文時代の日本列島—自然と共生—』

第7～11図 仙台市教育委員会編 1995『高柳遺跡 本文・写真・図版編』仙台市文化財調査報告書第190集

第12図 早坂春一 2005「縄文文化を考える」『旧石器時代と縄文時代の文明文化を考える』講座資料

第13図 仙台市教育委員会編 1995『高柳遺跡 本文・写真・図版編』仙台市文化財調査報告書第190集

第14図 ①東北歴史博物館編 2000『春季特別展縄文時代の日本列島—自然と共生—』

②仙台市教育委員会編 1989『上野遺跡』仙台市文化財調査報告書第127集

③早坂春一 2005「縄文文化を考える」『旧石器時代と縄文時代の文明文化を考える』講座資料

参考文献

伊藤道人編 1980『週刊朝日百科 世界の美術 103 縄文・弥生・古墳時代の美術』朝日新聞社

芹沢長介 1979『陶磁大系 第一巻 縄文』平凡社

仙台市教育委員会編 1989『上野遺跡』仙台市文化財調査報告書第127集

仙台市教育委員会編 1995『高柳遺跡 本文・写真・図版編』仙台市文化財調査報告書第190集

仙台市市史編纂委員会 1999『仙台市史 通史編 I 原始』仙台市

東北歴史博物館編 2000『春季特別展 縄文時代の日本列島—自然と共生—』

早坂春一 2005『旧石器時代と縄文時代の文明文化を考える』講座資料

註

(1) 『週刊朝日百科 世界の美術 103』の中で、小林達雄が寄稿しており、「ところが、中期の文様では、モチーフの単純な繰り返しではなく、いくつかのモチーフがそれぞれの区画に配されながら、全体としてひとつの文様を構成するという種類を新たに含むようになった。それは関東・中部地方の勝坂様式に顕著で、大木様式や火炎土器様式などにも表れた。土器の器面に施されたこれらの文様は、装飾するというよりはむしろ、土器の現実的な機能とは直接関係のない、ある事実を表現するものであったことを示唆している。いいかえれば、縄文人の意識的世界を反映する物語が、土器の器面に託されたということができようか」と述べている。

大代遺跡—古墳時代後期の東北地方での一例—

ジェルマナ グレコ

はじめに

1984年に都市企画街路工事の折に横穴墓8つと塚1つを見出した。そのあとで発掘調査したところ16の墳墓が見つかった。そこから重要な副葬品として勾玉や切子玉などが出てきた。特に発掘された刀剣の中で金銅装頭椎大刀かぶつちのたちはこの時代の東北では特殊な遺物であり、宮城県で見つかった3つ目の例である。

この古墳時代後期の遺跡を考察する前に一般的な古墳時代を分析する。古墳時代というとだいたい特徴的な大きな塚の現出に特性が見られ、埋葬の方法よりも副葬品類の変化を検討すると、異なる時期および社会の発展段階を特定することができる。この考察をした後に、大代遺跡の遺物の解釈を試みる。



図版1 大代遺跡南西斜面（宮城県多賀城市）

古墳時代のはじまり

古墳時代は3世紀後半から7世紀初頭まで四世紀ほど続いた時代だった。新しい支配階級を安置するための特徴的な塚で行う葬送儀礼に、特定の社会の変化が見られる。

日本列島には五世紀以上の間、水田農耕の生活様式を取り入れた弥生社会が拡大した。紀元前1世紀の初めには、九州を皮切りに日本列島が大陸、特にコリア半島から新しい技術や道具の影響を受けた。特に、紀元前3～

4世紀頃には、水田稲作の導入で影響を受けた。当時の歴史的な地理的状况から、国境を接する中国の北東部にあるYenの領土が拡大したことにより、コリア半島は紀元前3世紀から中国の影響を多大に受けていたことが分かる。

さらに、紀元前4世紀頃に北方からツングース系遊牧民が侵入して、後に任那と呼称する南部から、一部のコリアの人々が日本に移動した。

この移動に伴い、日本列島では同時に水田稲作を始めることを決定し、土地を耕すための農具やろくろなどの道具を導入した。石庖丁などの大陸系磨製石器の技法が始まり、まず副葬品として銅鏡や鉄製または青銅製の工具（斧）や耕具などが見つけられ、日本でもこれらの製作がされている。

そして、弥生時代には葬送儀礼として、北九州を中心として甕棺墓が行われ、土壙墓や墳丘墓が用いられることもあった。



図版2 四隅突出型墳丘墓（鳥取県妻木晩田遺跡）

農村では系統の関係を基盤とした社会となり、村長のような少数の人だけが特別な存在であった。人類学的に弥生時代に形成された社会を観察すると、より明確な社会秩序と組織が与えられ、必然的に自然にリンクされなければならなかったと仮定することができ

る。それは、主に稲作を行っていたことから、自然の要素と同様に、季節の変化を重視することから想定できる。そのため、この時代から、後に神道として形成されるような自然に捧げる祭祀が始まったと考えられる。

そこから、村長は集落の指導者としてだけでなく大祭司としての意味も持つことになると考えられる。また、埋葬方法が変化する傾向もあり、その初めの頃の塚の形状を見ると古墳時代への継続が推定できる。

弥生時代の初めに起きたように、2世紀になると、他の影響もコリアから日本列島にやってきた。それは副葬品類に見定められる。特に古墳から出土する武器が増加することが確認されたので、新しい社会を特徴づけるのは、新しくつくられた武人階級によるものであると推測できる。

はじめに古墳時代の社会は、系統組織から氏族の制度になっている。各氏族は祖先を同じくする親族の集団「ウジ」と呼ばれ、ヒエラルキーに分かれていた。氏族の祖先は神と見なされ、氏神と呼ばれる。それから氏族の筆頭も氏上と呼ばれ、一族を率いていた。高い階級である武人の他に、一般民は「べ」と呼ばれ、社会の少数だけ奴隷のように扱われた。この後者は「ヤッコ」と称する。

遺物にかかわらず、コリア半島から引き続き人々が移動してきていることは、様々な氏族が特殊な技能を持つコリア職人を呼び、姓を与えていたことから指摘できる。

それでは、このヒエラルキーに組織が整っていくところを見ていくと、古墳の分布が拡大するのが顕著である。しかし、上記のとおり実は特徴的な巨大な前方後円墳の現出が展開の頂点のように解釈できる。すなわち南西地域から大和政権の領土が発達するのに伴い、氏族指導者が形成された。氏上のもとで特殊な職人が呼んでられ、材料を開発及び管理しクニが相互に鉄か銅及びガラスや朱などの取引も展開させた。そして全体のコミュ

ニティが協力して氏族指導者の名誉として巨大古墳の築造が決定されたと考えられる。

古墳の分類

アジアのステップで遊牧民が大規模に異質な塚の「名誉埋葬」を使用していたのに対し、前方後円墳の形状は日本と朝鮮半島南部でしか発見されていない。この形状がどう現出したか解釈するために変化の過程を示す必要がある。

古墳の形を考察することで、社会の進化も解説できることがある。そこから、古墳時代は段階に分けられる。しかし、この分類とともに副葬品類の変化に注目することも大切である。そこから菊地芳朗の考えに基づき、古墳時代を五つの時期に分割し、特徴を述べる(菊地 2001)。

早期：2世紀終から

前期：3世紀半ばから

中期：4世紀後半から

後期：6世紀初頭から

終末期：7世紀初頭から終わりまで

とりあえず初めの特徴的な塚を考慮して、古墳時代早期は竪穴式石槨と特定されている。しばしば遺骸は箱式石棺などで安置した。副葬品として銅鏡、武器類および玉類が見つけられる。

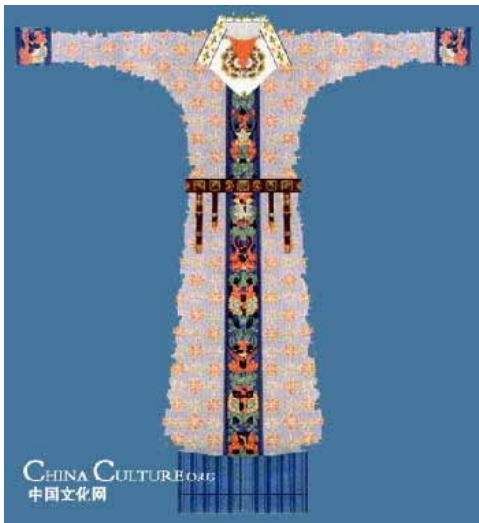
古墳時代前期に初めて全長が100メートル未満の形態の古墳が見られる。例にすればホケノ山古墳が(奈良)一番大きい。まだ地域色は強い。

古墳時代中期から、奈良盆地で形状が特徴的な巨大な前方後円墳が現出することがある。最初の天皇(垂仁、応神、仁徳など)にちなんで名付けられた、人々に周知されている古墳を検討したところ、形やサイズが異なっていることを考察できる。例えば正面と裏のテラスの数は変わり、一方で仁徳天皇陵古墳以外の全長は300メートルほどあった。副葬品となるといろいろな鉄製品類を見つけ

られるし、異質な銅鏡や石製の腕輪のようなジュエルや、鋭角縁鉄鏃も発掘した。

そこから、この時期に画一化された葬送儀礼が行われるようになったことを把握できる。まだ中央政府のようなものであるとは解釈していないが、この名誉な塚は地域統治の発展の過程で生じている。上記のように、古墳の典型的な形は1つだけではなく、面積と時間の違いを除いた変遷に関してはまだ疑問が多いが、特に近畿地方で大和を基盤とした氏族と巨大古墳の優位性が見える。

土器の加工も変わることがある。4世紀終～7世紀初頭の窯は傾斜地に穴を掘り、炎が下から上に効率よく流れるようにしたものである。温度は1900℃までになり、須恵器を制作する。この須恵器には、より精製された粘土が使われている (Alabiso, 2001)。



図版3 hufu

この変化は埴輪の生産にも見える。埴輪は、古墳時代に特徴的な遺物で、塚のテラスに立てられた人物形および動物形の土製品である。時期で変わり、埴頂部に多く見られる円筒形埴輪と、後に家形を皮切りに、被葬者の生活に対応した複雑な形の形象埴輪とに分類できる。それについて中国の唐代の埋葬品である「míngqì」という捧げものを思い出し、人物形埴輪の服装にも注目するべきであると感じた。中央アジア式の上着とパンツに分か

れた「hufu」のような服を着ている点は大陸から派生したことの証明として示すことができる (Alabiso, 2001)。

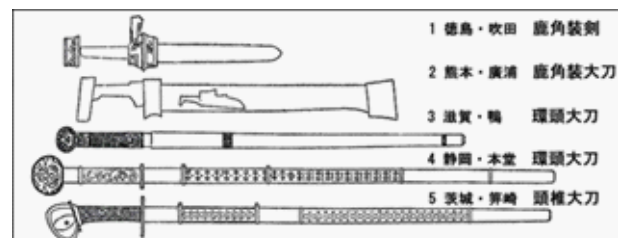


図版4 人物形埴輪 (Alabiso, 2001-Tavola 23)

古墳時代後期には、この巨大な古墳が奈良盆地の北側で拡充することが指摘できる。副葬品から、大刀および一般的な長剣が実用化したことが分かる。飾りや武器などの金属器類、須恵器などの増加がみられる。さらに遺物の生産を検討すればコリア文化の影響が見え、同様に大陸の影響は、石室の幾何学的構成に見ることができる。

全国で九州から東北まで槍、銅鏃、小型および細型鉄鏃、小刀、大刀など異なる武器類を見出せることが、社会の広範な軍事化を示している。

特に近畿地域から北九州瀬戸内海地域まで制度化された軍事力を推定できる。



図版5 古墳大刀類



図版6 将軍山古墳
(埼玉県行田市、4世紀終)

ヒエラルキーの組織については、大阪の百舌鳥・古市古墳群の例を考察すると、巨大な古墳に小さい塚が寄せられていることがある。副葬品は豊かで、帯金式甲冑や革盾が特徴である。

後に天皇を輩出するような大和を基盤とした勢力の優勢が現出した後で、仏教が導入され（従来の説は西暦 538 年、『日本書紀』によれば 552 年）、巨大な前方後円墳はみられなくなり、かわりに横穴墓および古墳では、横穴式石室が使用され、素晴らしい装飾壁画の例と同様に石室の壁に絵が描かれた古墳の現出することがある。

その中で、例えば中田横穴墓（6 世紀後半、福島県いわき市）では、五基が三段に並列しており、その一番下の横穴には赤と白の顔料で三角文が三段描かれ、大刀や甲冑、馬具や青銅製の蓋のように豊かな金属の副葬品を有した。そして五郎山古墳（6 世紀末、福岡県筑紫野市）及び王塚古墳（6 世紀中ごろ、福岡県嘉穂郡）では赤、白、黄、緑、黒の顔料で描いた人間の姿や動物、船、三角文、双脚輪状やわらび手文が構造した壁画がある。

高松塚古墳（7 世紀末、奈良県武市郡；国指定重要文化財）は一番著しく、ここで「飛鳥美人」と呼称した有名な壁画が見つかった。朝鮮式か唐様フレスコ画というものである。さらに天井には朱と金箔で星座の絵画（星宿図）を表している。



図版 7 高松塚古墳北西壁（奈良県武市郡明日香村）

刀剣の分類

古墳を分類していくと、副葬品から緩やかな変化が検討できる。遺物数が多いので一般的な副葬品から三つの時期に分類する：銅鏡の段階、挂甲式や短甲式の甲冑が特徴とされた段階、大刀の段階。

特に刀剣については形態の変化に焦点を当てると面白い結果を検出した。



図版 8 蛇行刀 島内 2 1 号地下式横穴墓群出土（宮城県えびの市、古墳時代中期）

古墳時代に初めて武人が出現し、変化していったと仮定すると、それを裏付けるためには、武器の形状を分析することが大切であると考えた。それならこの場合にも中国または韓国の影響を見定めることがある。「ji」戟や「ge」戈などの中国で用いられたタイプの武器は見出せなかったが、わらび手文や環頭のような柄の装飾に唐様を見られる。しかし装身具が発展する前に刀剣には 7 世紀まで形態の融合と併存が続く。特に新羅国が技術の向上の媒介としての役割を担った。変化は 8 世紀になって終わり、大刀の形状が一つに固定する（菊地 2001）。

最初は装飾を付けるために鹿角や木のように腐朽する材料を使っていたことから、型を区別することが困難である。外面の装具はさておき、柄の基盤は木で作られた。また、一木造り柄を使用して刃の茎（なかご）を入れるような把（つば）もある。後期になると、金属で鐔（はばき）と鍔の制作が始まる。

それから初めて、研究者は刃の分析に焦点を当てた。とにかく刀剣と槍を区別することが大切であった。しかし、しばしば柄が欠落

して発錆しているので、見分けにくいのである。一般的に刀剣の長さはだいたい 40 ～ 80 センチである。刃が 60 センチ以上のものを大刀として考えている。この長さ以下のものが、槍か小大刀のように考えられる。横断面を観察して刀剣なら菱形と凸レンズを指摘して、槍は横断面で正方形に近い、菱形またはもっと広い類が凸レンズか三角形の特徴を持っている。しかし、今も槍の装具（柄）のこととなると漠然としている。

地位が異なってきたことを推定できる。

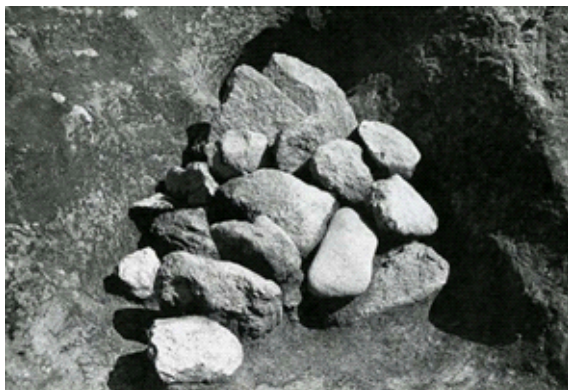
大代遺跡



图版 9 多賀城市遺跡位置図

後期と中期にさかのぼる。報告書によると、大代遺跡は泥と砂と礫を包含した沖積丘陵にある。1～9号横穴が南西斜面で出土して、10～14、21～22号横穴が南東斜面へ続く。12号と13号の間に塚が検出された。5基の横穴古墳(11号、13号、14号、21号、22号)が、5～6メートルの標高で占めるが、その他の墓は1.5～4メートルの標高で掘った。横穴墓の平面形と標高レベルで相対的な編年を作りだすことが考えられた。

全部の横穴墓で玄門に閉塞石があり、特に1～3号だけこの石はそのまま置いておいた状態で見つけられ、天井が崩落しなかった。1～6号横穴墓は基本的に玄室、玄門と羨道に構成された。



図版 10 2号横穴墓閉塞石状況

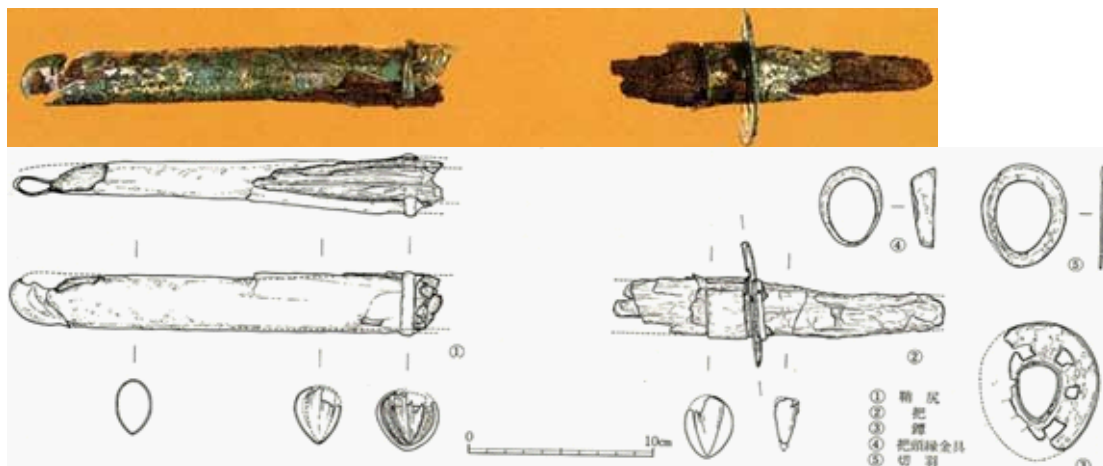
1号墓は比較的良好な保存状態であった。奥行1.7メートル、奥壁幅1.6メートル、前端幅1.34メートルを測り、玄室はほぼ方形の平面形と変形ドーム形の立面形を有する。

出土遺物は皆無である。

遺物は5号、6号、21号の墓から出てきた。5号墓で玄室の奥壁近くに耳環が2点あったが、1点の残存状態が悪い。21号墓からは勾玉3点、切子玉1点が見つけた。勾玉1点は床面上で、他の2点は堆積土第3層より出土している。いずれもメノウ製で「コ」字形を呈し、穿孔が一方向からなされていた。切子玉は床面上で発掘して、断面形が六角形であり、水晶で作られたものである。穿孔は一方向からなされている。

縄文土器片も周溝埋土および堆積土より数点出てきた。それでも一番重要な遺物は6号横穴墓で出土した金銅装大刀および鉄刀であった。どれも玄室床面直上の第3層から出てきて、玄室中軸より左側の側壁添いから奥壁に分布した。金銅装大刀は玄門付近から発見されたのに対して、鞘尻部分は奥壁近くで発掘し、把頭および刀身部分の2ヶ所が欠損している。このことから原位置を保っていないと考えられる。

鉄刀表面に鞘木と思われる木質の痕跡が認められ、金銅装大刀の残存をみると、把頭を欠損しているが、装飾大刀の特徴に基づいて、頭椎大刀と推定されている。県内において頭椎大刀の出土例は、2例が上げられるにすぎない。それは、名取市山岡古墳と岩沼市二木横穴古墳群である。しかし福島県における頭椎大刀の出土例をみると、9例を上げること



図版 11 6号横穴墓出土金銅装大刀

ができる。つまり東北地方出土の頭椎大刀は、概して横穴式石室を内部主体とする円墳に副葬される例が多く、横穴墓出土例は、本例を含めて、3例である。

そして遺構外から土器が出土した。この遺物には、土師器壺、須恵器甕、壺、提瓶があった。これらと相まって、石製紡錘車と金環が出てきた。この遺物はすべて丘陵西斜面の裾部で発掘した。



図版 12 大代遺跡出土遺物

最終考察

最初の古墳時代についての考慮に沿って、大代遺跡は古墳時代後期に位置づけられる。この横穴墓類は古墳時代後期になると、新興の武人氏族が東北まで影響したことを指摘している。大代遺跡で出てきた遺物の中で、少なくとも6号墓から出土した鉄刀および金銅装頭椎大刀は特徴的な資料である。刀剣の使用は古墳時代の間、ずっと続き、全国に拡充する。

そして古墳時代の研究によって、最近では、武器の形態が変化することに焦点が当てられている。今回のレポートでは、刀剣の特徴か

ら古墳時代の編年を考察した。それに伴い、社会及び海外の影響について解釈することができた。

鉄刀については、大代遺跡6号横穴より出土した鉄刀の中で全体の原形が復元できたものが1振ある。この鉄刀は、全長31センチの小形のもので、関部に鉋が残存している平造り鉄刀である。この鉄刀の特徴は、茎の幅が尻部でややすぼまる細尻形を呈し、関の切れ込みは刃側、背側ともに浅く切れ込んだ両関タイプに属するものである。このタイプの鉄刀は、7世紀以降に出現すると考えられている。

また、特に頭椎大刀のこととなると、横穴式石室を内部主体とする円墳及び前方後円墳に副葬される例が多く、前にも述べたとおりに東北で横穴墓では三例があげられる。

頭椎大刀の出土分布についてしてみると、南は九州福岡県から北は宮城県までほぼ全国的な分布を示すが、おおよそ100ヶ所の出土地の約80%が東日本にあり、特に関東地方に集中している。出土する古墳の多くは、円墳が主体を占め、横穴墓がそれにつづく。千葉県や群馬県など関東地方の一部では前方後円墳からも出土している。東北地方では、出土分布が福島・宮城に限られており、これは横穴墓の分布と一致している。

さらに、福島県下の出土例を中心にして、頭椎大刀の絶対年代は葬送儀礼を行う古墳や横穴墓からの推定は困難であるとしながらも、千葉県金鈴塚古墳から出土した環頭大刀や方頭大刀、圭頭大刀、鶏冠頭大刀のような例とともに、横畦目式の流行期を7世紀前半に位置づけ、頭椎大刀の年代は6世紀末～7世紀中葉と考えられている（多賀城市教育委員会編1985）。

以上のことから、頭椎大刀が出土した大代遺跡6号横穴墓の年代は、7世紀前半頃に位置づけられ、発見された横穴墓群の年代については、横穴古墳の構造及び変遷からおおよ

そ7世紀前半～8世紀にかけて造営されたものと推定している。

比較研究の上では、全古墳類が新興の氏族に使用された可能性を指摘し、東北地方でも恐らく前から近畿氏族と関係がなり立っていたことから、装飾および葬送儀礼の習慣が似通っていることを観察することができる。

引用図版

- 図版1 多賀城市教育委員会編 1985「大代横穴古墳群発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第7集
- 図版2 世界の歴史まっぷ <https://sekainorekisi.com/>
(2020年2月4日閲覧)
- 図版3 Woman's costume in the Tang Dynasty,
<https://www.chinadaily.com> (2020年4月6日
閲覧)
- 図版4 Tavola 23, 2001、Alabiso 「Lineamenti di storia
dell'arte giapponese」
- 図版5、6 東京国立博物館画像検索ページ
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/>
(2020年2月4日閲覧)
- 図版7 山岸良二・瀧波貞子・臈谷寿監修 2009
「ポプラディア情報館 日本の歴史1」ポプラ社
- 図版8 宮崎県西都原考古博物館 収蔵品検索
[http://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/
database.html](http://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/database.html) (2020年2月4日閲覧)
- 図版9 奈良文化財研究所データベース
「多賀城市遺跡地図」
<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>
(2020年2月4日閲覧)
- 図版10、11、12 多賀城市教育委員会 1985「大代横穴古
墳群発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書
第7集

参考文献

- 多賀城市教育委員会編 1985『大代横穴古墳群発掘調査報告
書』多賀城市文化財調査報告書第7集
- 菊地芳朗 2001『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出
版会
- Alabiso 2001『Lineamenti di storia dell'arte Giapponese』
Bulzoni
- Caroli, Gatti 2006『Storia del Giappone』Laterza
- Fairbank J.K. Reischauer, E.O. Craig A.M. 1974
『STORIA DELL'ASIA ORIENTALE. VOLUME I.
LA GRANDE TRADIZIONE』Einaudi
- 国営飛鳥歴史公園ホームページ
<https://www.asuka-park.go.jp/area/takamatsuzuka>
(2020年2月4日閲覧)

森を育む縄文人

樽 義夫

はじめに

2019年の寒い冬の日、「市民文化財研究員」の募集を知った。その時、高校時代に、相沢忠洋が納豆の行商をしながら発見した岩宿遺跡の展示に関わった記憶が蘇り、応募することにした。

それ以来、考古学とは縁がなかったため、準備をするつもりで市民図書館に行った。そして「地底の森ミュージアム」「縄文の森広場」に共通する「森」の語句に魅かれ、「森」をキーワードにして検索することが増えた。『森の文明史』の著者である安田喜憲の本などを見つけ数冊眺めている間に、次のような文章に共感した。

「縄文時代の遺跡からは様々な日用品が出土している。しかしその中でないものがある。それは人と人が集団で殺し合うための道具であった。縄文時代に人間同士が大量に殺しあう戦争はなかった。縄文時代はまた、貧富の差が小さな社会であった。『生命の再生と循環を大事にし、人を信じ自然を信じる』これが縄文人の世界観の根幹を形成するものだった」（安田 2009）。

気候変動が大きなニュースになる今、「生命の再生と循環」の言葉が胸に刺さり、縄文文化を調べることで、これからの時代に生きるためのヒントを見つけられるのではないかと考えた。

1. 目的

毎日のように、SDGs（持続可能な開発目標）、ESG（環境・社会・企業統治）という文言、あるいは地球温暖化、気候変動が新聞等のニュースで取り上げられる現代に、縄文人の生活から学べるところがあるのではないだろう

か。1 万年以上もの長い間、戦争のない平和で安定した社会であった縄文時代。定住生活、食糧事情、クリの栽培・利用を中心に、自然と対話しながら暮らした縄文文化を調べてみた。

2. 定住とくらし

シカなど様々な獲物を追い探し、手に入れた肉を生のままや火に炙って食べるのを基本としていた移動生活から、縄文時代になると、トチ、ドングリなどの木の実、ゼンマイ、ワラビなどの山菜を見つけ、家族で炉を囲んで食事をする定住生活へと変化した。人々の生活が大きく変化した経緯はどのようなことであっただろうか。

勅使河原彰は、「堅果類や根茎類を食として利用するためには石皿や磨石などの製粉具と加熱処理をするための土器が必要となります。しかし石皿や土器などは携帯するには不向きです。こうした道具を使いこなすためには、定住することが求められるようになった」としており、さらに、「定住化の傾向はそれまで食料資源として利用してこなかった水産資源にも眼を向けることになった」と述べている（勅使河原 2013）。

小林達雄は、「土器の製作の際、粘土を見つけ出し、焼き上げるまでに要する多大な労力と時間等を考えた時に『遊動的な生活』から『定住生活』へ進んだ」と、土器の生活と定住生活の関りを指摘している（小林 2018）。

食料の豊富さと定住の暮らしについて松木武彦は「定住という安定した暮らしと栄養価の高い食物は、個々人の平均寿命を伸ばした」と述べている（松木 2016）。

遊動的な生活であれば、移動についていけない人などは足手まといになることもあっただろう。しかし定住生活ではそういった人も一緒に暮らし、子守や教育も出来たのではないだろうか。

安田喜憲はこうも書いている。「縄文人は家族の絆とだんらんをととても大事にしたはずである。縄文文明ほど土器にこだわった文明は世界にも例を見ない。世界最古の土器を作った縄文人は世界最古の家族を作った人でもあった。土器を囲み、海と山の幸をゴッソリ煮して家族で食べる方法をはじめて考えたのも縄文人である」と（安田 2009）。

定住による暮らしの安定は、土器へのこだわりや家族の親密さも増加させたのではないだろうか。現代人から見ると、口縁部に実用的でなく、むしろ邪魔な突起や装飾文様がついた煮炊き用の土器。それらを囲んで、食材となった魚介類や山菜に感謝し、その気持ちを抱きながら、あるいは土器の文様を眺め再生を祈りながら、食したのではないだろうか。そのような祈りがまた、家族の絆を深めていたのではと想像してしまう。



図1 円筒式土器
（岩手県 御所野遺跡）

3. 食料

藤本強は、「縄文人の暮らしを支えたのは、森を中心にして季節ごとに得られる豊かな資源です。日本列島の場合には、多量に獲得できる資源はほとんどありません。資源の種類は豊富ですが、いずれも少量でしかありません」と、日本列島の自然の豊かさと縄文

人の資源開発力について述べている（藤本 2008）。

また小林達雄は、「季節とのつながりまで頭に整理されるようになります。名づけして覚えていく。情報として蓄えることで食料事情が充実、発展していくわけです」と述べており、「縄文人の食料が多種多様にわたっていること（中略）時期によって、地域によっても、その食糧の組み合わせには変化があった」と述べている（小林 2018）。

戸沢充則は、土器との関係について、「アケをもった木の実も、繊維の強い植物や動物の肉も加熱・煮沸をくり返すことで、美味しく柔らかい食料にすることができた。複数の食材を組み合わせることで新しい味覚を次々に生み出した」としている（戸沢 2012）。

四季の生業と食料について、勅使河原彰の考えを参考に、以下のようにまとめた（勅使河原 2013）。

春…山菜つみの季節

ゼンマイ、ワラビ、ノビルなどの山菜

夏…漁の季節

アワビ、マダイ、クロダイ、マス、スズキ、サケ

秋…木の実がみのる季節

クリ、クルミ、トチノミ、ドングリ

冬…狩の季節

シカ、イノシシ（脂がのって猟もしやすい初冬を中心に捕獲されていた）

また、岡村道雄は、食料の貯蔵や保存食料について「旬に多量にとれた食料を干し貝、干し魚、干し肉、燻製等の保存加工と長期保存、貯蔵の工夫は定住を支えた重要な技術」であったと述べている（岡村 2018）。

小林達雄は、「縄文人の食が、植物や動物性食料の多種多様な利用によって特色づけられ、決して数少ない限定された種類に偏ったものではなかったことは、もう1つの注目

すべき重大なる意味を持っています」と述べ、自然環境への適応を深めていった歴史を「縄文施政方針」と呼んだ（小林 2018）。「縄文施政方針」というのは「自然界の多種多様なものを利用することによって、生活の安定を確保するもの」であり、一方、「農耕」というのは、ごく少数の限られた栽培作物に手間ひまを全て投入して、増収を図って、そして安定しようとする。それが現代の経済まですっと続いている」と述べている（小林 2018）。

4. クリの栽培

縄文人は、クリを食料として利用しているだけではなかった。三内丸山遺跡のシンボルの存在とされる「6 本柱建造物」。柱穴が直径 2 m、深さ 2 m もあり、そこに残っていた丸木柱は直径 1 m もあった。遺跡から出土した柱材の樹種を調べた結果、100% クリ材であったので、この建物もクリでできていたことが分かっている。鈴木三男は、「樹齢 50 年、100 年の木材を得るにはそれを若いときに伐らずに残して 2 世代、3 世代後（いわゆるまごこの世代）が利用するという未来を見越したプランが必須」だとしている（鈴木 2016）。縄文人は、自らの代のためだけではなく、子孫のためにクリの木を管理していたことになる。



図2 復元された6本柱建造物
（青森県 三内丸山遺跡）

また、クリは「木材を建築、土木などの用材として利用が始まった」としている。つまり、クリは「『有用な木材』を与えられる『木』として縄文人に認められたのでしょう。これがクリと縄文人の始まりだった」と述べている（鈴木 2016）。

また、「縄文人の日々の暮らしは炉を中心に行われたことでしょう。炉のまわりで作業をしたり、家族が集まって食事をし、語り合ったことでしょう」と、燃料としてのクリについて記している（鈴木 2016）。

縄文人は、クリを美味しい実として食するだけでなく、有用な木材として利用し、木材加工で発生する端材は燃料として利用していたようである。

残すところなく 100% 活用することが、植物としてのクリへの感謝の気持ちだったのかもしれない。

おわりに

この 1 年の間にもオーストラリアでは森林火災が発生。日本の面積の 3 分の 1 ほどにもあたる 1260 万ヘクタール以上が焼失し、コアラ等多くの生き物たちも被害にあった。

日本でも、「令和元年房総半島（15 号）台風」、「令和元年東日本（19 号）台風」と命名された記録的な暴風、大雨により大きな被害が発生した。

地球温暖化と気候変動に世界が一体となって対処するために、自然と共存共栄した縄文人の知恵に学ぶ必要を改めて感じた。

小林達雄は、自然との「相身互い^{あいみが}」だけではなく、「家族が自分たちの家を建てるには、1 つの家族の働き盛りの人だけの力ではどうにも実現しにくい。そうすると他の家族の手助けが必要です。そのようなお互いに助け合う中に縄文社会的な仲間意識の芽生えがあっ

た」とも記している（小林 2018）。

考古学からは離れるかもしれないが、「森」つながりで、ドイツの「森の幼稚園」における気候変動教育の取り組みを引用する。「自然の中で子どもたちが、さまざまな生き物や自然について五感をフルに使って探索することが大切にされています。一年を通して、ブルーベリーと森に住む生き物たちの関係について体験しました。そして夏に収穫するブルーベリーが、冬に売られているのを見て疑問に思った子がいました。『冬に売られているブルーベリーは外国から飛行機で運ばれてくること』、『外国からくるブルーベリーはドイツ国内のブルーベリーと品質は同じだけれど、CO₂ 排出量や環境への悪影響が大きい』ことを調べた後に、先生が子どもたちに『冬にもブルーベリーは、必要なのかな？』と聞きました。子どもたちはすぐに『他のフルーツを食べたらいいい』、『冬にブルーベリーは食べない』と答えました」（永田 2019）。

森の中で、小動物、昆虫、木々や草花に囲まれて育った子どもたち。五感を使った自然体験が、動植物を思いやる気持ちを育んだように思う。

これは、森に育まれた縄文人が、自然に対する畏敬の念、恐怖と感謝の気持ちを抱いたのと同じなのではないだろうか。私たちも、地球温暖化や気候変動などから生まれた「負の遺産」を次の世代に相続させないために、2 世代、3 世代後のまごこの人たちに幸せに暮らしてほしいと願う気持ちを、縄文人から学べるのではないだろうか。

図2 御所野縄文館編 2020『縄文ムラの原風景』新泉社

参考文献

- 岡村道雄 2014『縄文人からの伝言』集英社
岡村道雄 2018『縄文の列島文化』山川出版社
小林達雄 2008『縄文の思考』筑摩書房
小林達雄 2018『縄文文化が日本の未来を開く』徳間書店
鈴木三男 2016『クリの木と縄文人』同成社
勅使河原彰 2013『縄文時代ガイドブック』新泉社
戸沢充則 2012『道具と人類史』新泉社
永田佳之 2019『気候変動の時代を生きる』山川出版
藤本強 2008『考古学でつづる日本史』同成社
松木武彦 2016『美の考古学』新潮社
安田喜憲 2009『稲作漁撈文明』雄山閣
安田喜憲 2017『森の文明史』古今書院

引用図版

図1 山岸良二・瀧波貞子・隴谷寿監修 2009

「ポプラディア情報館 日本の歴史1」ポプラ社

市民文化財研究員活動報告書 24

発行日 令和2年（2020）年3月31日
発 行 仙台市教育委員会
編 集 公益財団法人 仙台市市民文化事業団
仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）
〒982-0012 仙台市太白区長町南 4-3-1
TEL 022-246-9153